theatre

COCOON

EVANGELION Beyond

本日は『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

今公演は本年4月新宿歌舞伎町に建設された東急歌舞伎町タワー内にオープンするTHEATER MILANO-Zaのこけら落とし公演として企画されました。歌舞伎町とともに発展し、エヴァンゲリオンとゆかりの深い映画館ミラノ座を継承する新劇場で、世界中の人々を魅了し続けてきたアニメ作品を舞台化し全く新しいエンタテインメントとして創り上げます。

英国で二度のローレンスオリビエ賞に輝き、身体表現と視覚的演出を融合させ独自の世界観を構築したシディ・ラルビ・シェルカウイが『プルートゥ PLUTO』（原作：『PLUTO』浦沢直樹×手塚治虫 長崎尚志プロデュース 監修／手塚眞 協力／手塚プロダクション）以来、満を持して本プロジェクトに挑みます。

主演には4年ぶりの舞台となり華と実力を併せ持った窪田正孝さん、演技のみならず身体表現でも魅了する石橋静河さんはじめ個性あふれる俳優陣に加えダンサー、歌手たちも多彩な顔ぶれが揃いました。クリエイティブスタッフも国内外の精鋭たちが参加しており、まさに新劇場の幕開きに相応しい舞台となりました。

最後にカラー、グラウンドワークスはじめ本公演の実現に向けて多大なるご尽力を賜りましたすべての関係者の皆様に深く御礼を申し上げます。

主催者

EVANGELION Beyond

舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド

2023

TOKYO
5.6 sat — 28 sun
THEATER MILANO-Za

NAGANO
6.3 sat — 4 sun
まつもと市民芸術館

OSAKA
6.10 sat — 19 mon
森ノ宮ピロティホール

COCOON PRODUCTION 2023

Staff

Role	Name
原作 Original Manga Story by	カラー khara,
原案・構成・演出・振付 Original Concept, Planning, Directed, and Choreographed by	シディ・ラルビ・シェルカウイ Sidi Larbi Cherkaoui
舞台版構成台本 Scenario by	ノゾエ征爾 Seiji Nozoe
上演脚本 Playscript Written by	渡部亮平 Ryohei Watanabe
ビジュアルディレクション・衣裳デザイン Visual Direction and Costume Design	柘植伊佐夫 Isao Tsuge
セットデザイン Set Design	岩本三玲 Mirei Iwamoto
音楽 Music	アレクサンドル・ダイ・カスタン Alexandre Dai Castaing
照明 Lighting Design	吉本有輝子 Yukiko Yoshimoto
映像統括 Video Production	カラーズクリエーション COLORs CREATION
映像制作 Video Creation	マキシム・ギスラン Maxime Guislain
音響 Sound Design	武田安記 Aki Takeda
特殊造形デザイン・特殊造形制作 Special Modelling Design & Production	松岡象一郎 Sho-ichiro Matsuoka
衣裳デザイン・スタイリスト Costume Design & Stylist	羽石輝 Akira Haneishi
衣裳デザイン・衣裳制作 Costume Design & Production	岩崎晶子 Akiko Iwasaki
ヘアメイク Hair & Make-up Designer	波多野早苗 Sanae Hatano
振付助手 Assistant Choreographers	大植真太郎 Shintaro Oue セバスチャン・ラミレス Sebastian Ramirez
演出補 Associate Director	杉原邦生 Kunio Sugihara
演出助手 Assistant Director	加藤由紀子 Yukiko Kato
通訳 Interpreters	時田曜子（演出家担当） Yoko Tokita (for Director) 人見有羽子（音楽家担当） Yuko Hitomi (for Composer) 竹上沙希子（音楽家・振付助手担当） Sakiko Takegami (for Composer・Assistant Choreographer)
舞台監督 Stage Manager	足立充章 Mitsuaki Adachi
プロダクションマネージャー Production Manager	野中昭二 Shoji Nonaka
舞台監督助手 Assistant Stage Managers	吉見裕司 Yuji Yoshimi 鷲北裕一 Yuichi Washikita 宇野圭一 Keiichi Uno 秋成絵美 Emi Akinari 本田康広 Yasuhiro Honda 西邑武人 Taketo Nishimura 小泉正義 Masayoshi Koizumi
照明操作 Lighting Operators	上田剛 Go Ueda 川崎渉 Wataru Kawasaki 横山紗木里 Sagiri Yokoyama 片山通子 Michiko Katayama
音響操作 Sound Operators	安川えみ Emi Yasukawa 溝渕澄香 Sumika Mizobuchi
音響ステージアシスタント Sound Stage Assistant	宮下康平 Kohei Miyashita
システムエンジニア System Engineer	野口利明 Toshiaki Noguchi
衣裳部 Wardrobe	中野かおる Kaoru Nakano 奈須久美子 Kumiko Nasu 今井眞弓 Mayumi Imai 森映 Hayuru Mori
ヘアメイク進行 Hair & Make-up Staff	北山まりえ Marie Kitayama
映像技術 Video Technical & Operators	新倉和幸 Kazuyuki Niikura 古田島邦明 Kuniaki Kotajima
制作補 Production Associate	和田由紀子 Yukiko Wada
制作助手 Production Assistants	足立悠子 Yuko Adachi 新居朋子 Tomoko Niii 梶原千晶 Chiaki Kajihara 加藤恵梨花 Erika Kato
大道具 Stage Carpentry	C-COM 伊藤清次 C-COM Kiyoji Ito オサフネ製作所 長船浩二 Osafune Seisakujo Koji Osafune 東京ビロード 鈴木匡平 TOKYO VELLUDO Kyohei Suzuki
背景 Painter	美術工房拓人 松本邦彦 Bijutsu Kobo Takuto Kunihiko Matsumoto
フライング機構・操作 Flying System & Operators	リンペット 林正 Limpet Tadashi Hayashi 河本昌洋 Masahiro Koumoto
ファブリック・スカルプチャー Fabric Sculpture	ファイバー・ワーク 八代利江子 Fiber Work Rieko Yashiro
特殊造形 Special Properties Animatronics	アトリエ・デコール 田中孝尚 Atelier Decor Takahisa Tanaka
特殊効果 Special Effect	酸京クラウド 磯田壮一 Sankyo Cloud Soichi Isoda
ハーネス製作 Harness Maker	CARRIQ INDUSTRIES 吉武潤 CARRIQ INDUSTRIES Jun Yoshitake
小道具製作 Props Makers	中村友香 Yuka Nakamura 畠山直子 Naoko Hatakeyama 長谷川愛美 Manami Hasegawa 篠川理湖 Satoko Shinokawa
衣裳製作 Costume Makers	柿沼薫 Kaoru Kakinuma 井上凌花 Ryoka Inoue 富樫理英 Rie Togashi 前田禮子 Reiko Maeda 井上裕子 Hiroko Inoue 西村友美子 Yumiko Nishimura 渡部亜沙美 Asami Watabe 甲斐彩香 Ayaka Kai 磯田美佐子 Misako Isoda
帽子製作 Hat Maker	シャポーヌ 下重恭子 Chapeaune Kyoko Shimoju
かつら製作 Wig Maker	アライカツラ deco. arai katsura deco.
映像監修 Video Direction	石多未知行 Michiyuki Ishita
映像制作補助 Video Production Assistant	フィリップ・アヨ Philippe Hayot
脚本協力 Sceanario Assistance	鏑木勲 Isao Kaburagi ミカエラ・ジェーン・レアード Mikayla Jane Lairad
資料翻訳 Document Translation	ボグダン真理愛 Maria Bogdan 伊藤美代子 Miyoko Ito 鈴木なお Nao Suzuki

衣裳協力
Costume Cooperation

世田谷パブリックシアター技術部
SETAGAYA PUBLIC THEATRE Technical Department
松竹衣裳
SHOCHIKU COSTUME
レインボー造形企画
RAINBOW
アームス フォゲイン
ARMSFORGAIN

ヘアメイク協力
Hair & Make Cooperation

BIODERMA
BIODERMA
ETVOS
ETVOS
カバーマーク
COVEMARK
D-UP
D-UP
ラ ロッシュ ポゼ
LA ROCHE POSAY
Koh Gen Do
Koh Gen Do

通訳協力
Interpreters Cooperation

兵頭愛子
Aiko Hyodo
門田美和
Miwa Monden

映像機材協力
Video Equipment Support

マグナックス
Magnux

稽古場
Rehearsal Studio

リーホースタジオ
Lee Ho's STUDIO

運搬
Transportation

マイド
Maido

協力
Cooperation

山田貴大
Takahiro Yamada
岩谷ちなつ
Chinatsu Iwaya
岩倉知伸
Tomonobu Iwakura
Eastman
Eastman
舞プロモーション
MY Promotion
KOOGEN
KOOGEN
真昼
Mahiru
RYU
RYU
エス・シー・アライアンス
S.C.ALLIANCE
ジーエム
GM Atelier
セレソンアート工房
Sereson art workshop
TAPP
TAPP
KUNIO
KUNIO
ゴーチ・ブラザーズ
GORCH BROTHERS
スマイルステージ
Smile Stage
リトル・ジャイアンツ
Little Giants
プラグマックス&エンタテインメント
PRAGMAX & Entertainment
渋谷ステージセンター
Shibuya Stage Center

レコーディングコーディネーター
Recording Cordinator

アイヴィ・ガンボア
Ivy Gamboa

レコーディングミュージシャン
Recording Musicians

ジュリア・ケント（チェロ）
Julia Kent (Cello)
村中麻里子（バイオリン）
Mariko Muranaka（Violin）
ソング ザ バイオリニスト（バイオリン）
Song the violinist（Violin）

法務アドバイザー
Legal Advisers

骨董通り法律事務所
Kotto Dori Law Office
福井健策
Kensaku Fukui
岡本健太郎
Kentaro Okamoto

中村合同特許法律事務所
NAKAMURA & PARTNERS
富岡英次
Eiji Tomioka
相良由里子
Yuriko Sagara
西村英和
Hidekazu Nishimura

宣伝美術
Publicity Art Direction

榎本太郎
Taro Enomoto

宣伝写真
Publicity Photography

伊藤大介
Daisuke Ito

宣伝衣裳デザイン
Publicity Costume Design

柘植伊佐夫
Isao Tsuge

宣伝スタイリスト
Publicity Stylist

羽石輝
Akira Haneishi

宣伝衣裳制作
Publicity Costume Arrangement

横田勝広
Katsuhiro Yokota
桐渕由美
Yumi Kiribuchi

宣伝ヘアメイク
Publicity Hair & Make-up

倉田朋美
Akemi Kurata

宣伝映像
Publicity Movie

原口貴光
Takamitsu Haraguchi

宣伝広報
Publicity Management

ディップス・プラネット
DIPPS PLANET

企画協力
Associate Production

伊藤寿
Hisashi Itoh

協力
Cooperation

カラー
khara,
グラウンドワークス
Ground Works

【東京公演主催】
Tokyo Production Presented by
Bunkamura
Bunkamura

エグゼクティブ・プロデューサー
Executive Producer

加藤真規
Maki Kato

チーフ・プロデューサー
Chief Producer

森田智子
Tomoko Morita

プロデューサー
Producer

金子紘子
Hiroko Kaneko

制作
Assistant Producers

青山恵理子
Eriko Aoyama
武内純子
Junko Takeuchi
石田華子
Hanako Ishida

制作助手
Production Assistant

小泉廉太郎
Rentaro Koizumi

票券
Ticketing Officer

青木元子
Motoko Aoki
柴田菜穂
Naho Shibata

TST エンタテイメント
TST Entertainment

劇場運営部 部長
Theater Operation Department Senior Manager

枝村義夫
Yoshio Edamura

【長野公演主催】
Nagano Production Presented by

サンライズプロモーション北陸
Sunrise Promotion Hokuriku

秋田考志
Koji Akita
和気淑恵
Toshie Waki

NBS 長野放送
Nagano Broadcasting Systems
一般財団法人松本市芸術文化振興財団
Matsumoto City Arts and Culture Foundation

後援
Supported by

松本市
Matsumoto City
松本市教育委員会
Matsumoto City Board of Education

【大阪公演主催】
Osaka Production Presented by

ABC テレビ
Asahi Televison Broadcasting

千代隆
Takashi Sendai
大川大樹
Hiroki Ohkawa

サンライズプロモーション大阪
Sunrise Promotion Osaka

山田泰彦
Yasuhiko Yamada
西上恵圭
Ayaka Nishiue

企画・製作
Planning and Production

Bunkamura
Bunkamura

［原案・構成・演出・振付］

シディ・ラルビ・シェルカウイ

『エヴァンゲリオン』に触れて見えたもの、感じたものを

作品を通じて道徳観、価値観を問う

――『テヅカ TeZukA』（12年）、『プルートゥ PLUTO』（15年・18年）に続いて、今回『エヴァンゲリオン』の舞台化を構想したのには、どのような理由があったのでしょうか？

私が作品の中で表現したい、向き合いたいテーマを考えたときに自然な流れでそうなりました。なぜなら私の演出家、振付家としてのキャリアの出発点には、道徳への興味があるからです。『エヴァンゲリオン』を舞台化するという行為は、まさに道徳観や価値観と向き合い「なにが正しくて、大切なのか」を問いかけることだと考えています。

『テヅカ TeZukA』を上演したときには、手塚治虫という人物に非常に個人的な繋がりを感じました。というのも彼もまた常に道徳観を追求した人でした。彼の作品は人間の光と闇を描いているし、『プルートゥ PLUTO』では浦沢直樹さん、そして長崎尚志さんとの仕事で同じことを感じました。

ただ浦沢さんや長崎さんとは話ができますが、手塚治虫とはそうはいきません。だから『テヅカ TeZukA』の公演が終わるときには、本人と語りたくても語れない悲しみを感じました。ある意味、手塚治虫の作品は手の届かないところにある。それに対して『プルートゥ PLUTO』では、二人のアーティストを介して作品にアクセスし、演劇という形で解釈できたと思います。

今回の『エヴァンゲリオン』の舞台化は、それらとはまったく異なります。これは『エヴァンゲリオン』という神話を使いながら、それと同時に私たち独自のアイデアによって生み出された作品です。だから原作であるアニメーション作品と同様にエヴァンゲリオンにパイロットたちが搭乗して使徒と戦うけれど、アニメとは大きく異なる物語になっています。

登場するキャラクターたちもアニメの要素を反映した部分はありつつも、まったく違う人物になっている。これはアニメを映す鏡のような作品ですが、ただアニメと同じものを映し出すわけではありません。今の世界を通して『エヴァンゲリオン』を映し出す鏡なのです。

ですから『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』は、ある意味で過去の『エヴァンゲリオン』を超えることを目指しています。そこで伝えたいのは「今、我々がどう生きているか」ということ。私たちは自分のために子供たちを犠牲にする生き方をしているから、次世代に持続可能な世界を渡せなくなっている。けれど子供たちは世界の正当な相続人なのだから、もはや彼らに世界を渡して、彼ら自身で作り直してもらうしかないのかもしれない。

冒頭の価値観の話に戻ると、私たち大人は「なにが正しくて、大切なのか」を学べずにいるのかもしれないし、あるいは学びを生活へ適応させる術を忘れてしまったのかもしれない。そういうことを描く作品でもあると考えています。

――『新世紀エヴァンゲリオン』や『ヱヴァンゲリヲン新劇場版』シリーズと大きく異なるのはトウマが消失すること、そして渡守という大人が物語の展開にコミットすることのように思いました。

個人的な観点から『エヴァンゲリオン』にどうアプローチできるかを考えたとき、アニメでは常に「シンジになにが起きたか」ということがベースにあることに気づきました。ならばそこから主人公を取り上げたらどうなるのか。単に主人公を登場させないのではなく、彼の消失と不在から物語を語るのはどうだろうかと発想し、彼を失った周囲の人物はどう反応し、行動するだろうかと考えました。

そして渡守は、子供の頃の出来事に今も苛まれている人物です。子供の頃に抱いた罪悪感との向き合い方にはいろいろな形がありますが、私が考えたのは、彼は罪を償うために善を為そうとするということでした。それは私自身の人生を思い出させる設定でもあります。

こうしたまったく異なる二人の運命が交わるアイデアに面白さを感じましたし、多くの神話にあるよう

に、喪失のあとには必ずなにか別のものが現れます。だからトウマと渡守は、同じ瞬間には存在し得ない存在になっているのです。

自身の中にある葛藤、対立を描く意味

——喪失のあとには必ずなにか別のものが現れる。その考えはラルビさんがイメージする世界の連鎖と循環、次世代にバトンを渡すことにも通じます。

そして、それが人生の難しさでもあります。誰かが消えたらそこに変化が生まれますが、それは直面する者のキャパシティや能力次第で、ポジティブなものにもネガティブなものにもなり得ます。

たとえばトウマの消失は叶にとって悪い方向に作用し、彼は破滅の道を進んでいく。それに対してイオリや子供たちは「トウマはなぜ消えたのか？」という問いに答えを見つけようとする。真実を知りたいと思う気持ちを触発され、探求の旅路に向かうわけです。

その過程で他者を思い、自分自身も変化していく。すなわち探求が「なにが大事なのか」という道徳観、価値観を理解する助けになることがわかります。そして、自分がすべての中心にいる世界観から、他者と時間や空間を共有する世界観へシフトし、周囲を大切にすることが自分を大切にすることへ繋がるのだと知る。

周囲が自分を大切にしてくれることを期待すると、常に苛立ちを感じることになると思います。なぜならそう望んでも、望みを満たすのに充分なものは返ってこないから。そうしたことも、トウマの消失を通して描いています。

そして『エヴァンゲリオン』という作品はなにが特別なのか。それは多くの謎を私たちに与えてくれるところです。だから観客、とくに『エヴァンゲリオン』のファンは、作品を理解し、読み解こうとするとき、そのためのエネルギーが求められます。この舞台では私自身が一人のファンとして『エヴァンゲリオン』に触れたときに見えたもの、感じたものを舞台上に立ち上げようとしています。だから登場人物は全員、私が世界に感じていることを反映した存在ですし、彼らが対立し葛藤する姿は、私の中にある対立であり葛藤でもある。

自分の中にある葛藤を解消できたら、人はより周囲のために尽力できるようになると思います。難しいことではあるけれど、私たちは誰かのために尽くせるはずだし、それを被害者、犠牲者のような気持ちにならずに行うには、自分の内面に平和を保つことが重要だと感じます。

たとえば叶は世界に新しいエネルギーをもたらそうと思って行動するけれど、手を出してはいけない場所からそれを手に入れ、世界を壊してしまう。それは彼が内面の平和を保てず、価値のある人間になりたいと思ったから。一方、渡守は隠遁者のような生活を送っているけれど、内面の平和を保ち、価値のあることを為す。真の英雄性は目に見えないものなのです。

渡守が植物に水を与えるように、命が生まれ育つにはそれぞれふさわしいプロセスがある。それを受け入れることが必要なのに、叶は即座に結果を求めようとします。でも無理に物事を加速させて結果を得ようとすれば、そこには高い代償が伴う。なのに叶は自分の過去を糊塗して、決して過ちの責任を取ろうとしない。真実を受け入れるのは時として痛みを伴います

が、それでも真実でしか癒せない傷もあると言っておきたいと思います。

——ありがとうございます。最後に新しい劇場のこけら落としとして、この作品を上演することへの思いを教えてください。

この戯曲はTVアニメと映画、両方の『エヴァンゲリオン』からインスピレーションを得ていますが、私たちはそれを演劇のベーシックな要素を使って表現しています。舞台上に人間がいて演技やダンス、歌、さらにパペットなど、SF作品を非常に伝統的な手法を使い、新しい劇場で形にしようとしている。とてもアナログなのです。

そして新しい劇場のオープニングを飾ることはとてもエキサイティングな経験です。とくにコロナ禍に見舞われたこの2年半はアーティストにとって、観客とのコネクションを断ち切られた非常に苦しい時期でした。

ソーシャルディスタンスの名のもと、すべてのコミュニケーションがデジタル化されてしまったからです。でも今、こうしてセレモニーとしての要素がある演劇に戻れること、そしてその中で今お話ししたようなことを劇場という開かれた場所で時には純粋に、時には知性的に伝えられることは、非常に重要だと思います。

この作品をご覧になったあとは、ぜひ皆さんで語り合っていただけたらと思います。この作品をどのように理解して、自分がどのように変わっていくのか。そんな会話が生まれるのを楽しみにしています。

Sidi Larbi Cherkaoui

ベルギー・アントワープ出身。ダンサー、演出家および振付家。ジュネーブ大劇場バレエ団監督。コンテンポラリーダンサー、振付家として2000年代に頭角を現し、『スートラ Sutra』や、ダミアン・ジャレとの共同振付による『バベル Babel (words)』などの注目作を発表。ローレンス・オリヴィエ賞（新作ダンス賞）、ジェイコブス・ピロー・ダンス・アワード、ブノワ賞（最優秀振付賞）など受賞多数。14年にベルギー王国より王冠勲章コマンドール章受章。映画『アンナ・カレーニナ』、『Girl ／ガール』、『シラノ』の振付、ビヨンセのグラミー賞（17年）でのパフォーマンスや、ビヨンセとジェイ・Zによる The Carters のシングル『APESHIT｜エイプシット』の共同振付、ブロードウェイ・ミュージカル『ジャグド・リトル・ピル Jagged Little Pill』（トニー賞（振付賞）ノミネート）の振付を担当。日本では12年に『テ ヅカ TeZukA』の構成・振付を務め、15年と18年には『プルートゥ PLUTO』で演出・振付を務めた。

Bunkamura × シディ・ラルビ・シェルカウイ

『テ ヅカ TeZukA』（2012） 撮影：細野晋司

『テ ヅカ TeZukA』

原拠：手塚治虫
構成・振付：シディ・ラルビ・シェルカウイ
2012年2月23日（木）～27日（月）Bunkamura オーチャードホール
『鉄腕アトム』、『どろろ』、『ブラック・ジャック』、『MW』など、手塚治虫の作品世界からインスパイアされた世界観が、ダンサー、ミュージシャン、武僧、書道家、そしてダンサー、俳優として高く評価されている森山未來により、壮大な映像表現と音楽とともに描き出された。ロンドンで初演され、東京、パリ、香港、ローマ、テルアビブなどで10ヵ国で上演。

© 浦沢直樹／長崎尚志／手塚プロダクション／小学館
鉄腕アトム「地上最大のロボット」より『プルートゥ PLUTO』（2018）撮影：細野晋司

『プルートゥ PLUTO』

原作：『PLUTO』（浦沢直樹×手塚治虫 長崎尚志プロデュース 監修／手塚眞 協力／手塚プロダクション）
演出・振付：シディ・ラルビ・シェルカウイ
2015年1月9日（金）～2月1日（日）Bunkamura シアターコクーン
2015年2月6日（金）～11日（水）森ノ宮ピロティホール
2018年1月6日（土）～28日（日）Bunkamura シアターコクーン
2018年2月8日（木）～11日（日）イギリス・ロンドン公演　Barbican Theatre
2018年2月15日（木）～17日（土）オランダ・レーワルデン公演　Stadsschouwburg De Harmonie（欧州文化首都レーワルデン2018招聘作品）
2018年2月22日（木）～24日（土）ベルギー・アントワープ公演　deSingel Red Hall
2018年3月9日（金）～14日（水）森ノ宮ピロティホール
手塚治虫『鉄腕アトム』の「地上最大のロボット」をリメイクした浦沢直樹・長崎尚志の漫画『PLUTO』を演劇作品として舞台化。シディ・ラルビ・シェルカウイと同じく手塚ファンで、『テ ヅカ TeZukA』に続いて出演した俳優・ダンサーの森山未來に、豪華俳優陣が加わり15年と18年に上演。18年の公演ではロンドン、オランダ、ベルギーの欧州ツアーも行われた。

エヴァンゲリオン舞台化に寄せて

株式会社グラウンドワークス 代表取締役　神村靖宏

今回のお話をいただいたとき、最初に感じたのは驚きでした。
「革新的な舞台を次々と世に送り出す、シディ・ラルビ・シェルカウイ氏の演出によって、エヴァンゲリオンを舞台化したい」
それは我々原作サイドにとっても、未知の世界との出会いでした。
意外に思うと同時に、光栄に感じたのを覚えています。

一方で、不安もありました。
企画書に目を通し、コンセプトを聞いてなお、いったいどんな舞台になるのか、まるで想像がつかなかったのです。
しかし、練習風景を見学させていただいたときに、そんな不安も吹き飛びました。
言葉を用いず、肉体のみでさまざまな感情や情景を演出する表現力に圧倒されたのです。
この手法で描かれるエヴァンゲリオンが見てみたい、と率直に感じました。

ラルビさんとの出会いも印象的でした。
彼の言葉の端々から、エヴァンゲリオンに対し、深い敬意をもって下さっていることがひしひしと伝わってきました。
この方ならきっと、エヴァンゲリオンのさらなる可能性を切り拓いてくれると感じました。

エヴァンゲリオンはこれまで、さまざまな企業や団体と無数のコラボレーションを行ってきました。
しかし、ここまで前衛的な取り組みは初めてです。
アニメーションと演劇は、観る人の心に訴えかけるエンターテイメント、という意味ではどちらも同じですが、ある面では両極端とも言えます。
かたや設計図をもとに、細かいところまでコントロールしながら、表に出ることのない大勢のスタッフがひとつの完成形を作り上げていく。
かたや人と人とが生でぶつかり合い、偶然性も伴いながら、1回1回、そのとき限りの舞台を観客に提供する。
異なるふたつのエンターテイメントが結ばれたとき、どんな化学反応が生まれるのか。
今回の取り組みを通じて、双方が新たな発見と経験を得られることを願っています。

今、この文章を書いている時点では、私もまだ、完成した劇を目にしていません。
しかし、ラルビさんをはじめ、スタッフやキャストの皆さんは、本当に真摯に作品作りに取り組んでいます。必ず、観た人の心に何かを残す舞台になると確信しています。
私もいちファンとして、開演を楽しみにしています。

エヴァンゲリオンとは

『エヴァンゲリオン』シリーズは、巨大な人型決戦兵器「エヴァンゲリオン」のパイロットとなった14歳の少年少女と、謎の敵「使徒」との戦いを描く、世界的に人気の高いアニメーションである。1995年に放送されたTVシリーズ『新世紀エヴァンゲリオン』は、スタイリッシュな映像と緻密な設定、ストーリー展開などによって、アニメに馴染みの薄かった層にも幅広く浸透し、一大ムーブメントを巻き起こした。一人ひとりが個性的でありながら、等身大の人間らしさを兼ね備えたキャラクターに、老若男女問わず多くの人々が共感。一方で、独創的な造形の巨大人型兵器が繰り広げる華麗なアニメーションは、アニメファンを唸らせ、さまざまな分野のクリエーターに大きな刺激を与えた。2007年よりスタートした劇場映画『エヴァンゲリヲン新劇場版』シリーズでは、新たな世代に向けた物語が、より進化した映像で紡がれ、若者を中心にさらなるファンを獲得。2021年に公開されたシリーズ完結編『シン・エヴァンゲリオン劇場版』は、観客動員数673万人、興行収入102.8億円の大ヒットを記録した。

新世紀エヴァンゲリオン

1995年10月4日〜1996年3月27日
毎週水曜日　TV東京系にて放映／全26話

西暦2015年。第3新東京市に、さまざまな特殊能力を持つ“使徒”が襲来した。主人公・碇シンジは、人類が“使徒”に対抗する唯一の手段である人型決戦兵器エヴァンゲリオンの操縦者に抜擢されてしまう。今、人類の命運を掛けた戦いの火蓋が切って落とされる。果たして“使徒”の正体とは？　少年たちと人類の運命は？

ヱヴァンゲリヲン新劇場版：序
2007年9月1日公開

未曾有の大災害“セカンドインパクト”の爪痕を残した地球――第3新東京市を目ざして“第4使徒”が襲来し、人類の命運は特務機関ネルフに委ねられた。14歳の少年・碇シンジは、連れられたネルフ本部でエヴァンゲリオン初号機に乗り使徒と戦うことを強要される。言われるがまま初号機に乗りこんだシンジは使徒を撃退。エヴァ零号機のパイロット・綾波レイとともに、使徒迎撃の任につくが、やがて襲来した“第6使徒”は初号機に大損害をあたえる。葛城ミサトは、日本全土の電力を一ヵ所に集め初号機の陽電子砲で使徒を撃滅する“ヤシマ作戦”を立案。果たして人類の運命は？

ヱヴァンゲリヲン新劇場版：序

ヱヴァンゲリヲン新劇場版：破
2009年6月27日公開

北極にあるネルフの基地・ベタニアベースで発掘された“第3使徒”をエヴァ仮設5号機で倒す、真希波・マリ・イラストリアス。一方、日本には式波・アスカ・ラングレーとエヴァ2号機が到着し、“第7使徒”を撃滅した。そして“第8使徒”が衛星軌道上から飛来し、ネルフ本部を襲撃。3機のエヴァが連携する作戦でこれを迎え撃ち、孤立気味だったアスカも仲間の存在に目覚めはじめる。ところが、起動実験中のエヴァ3号機が“第9使徒”に乗っ取られてしまう。迎撃に出たシンジは、その中に乗るのがアスカと知り戦慄する。碇ゲンドウは初号機の制御をダミーシステムに切り換え、3号機との戦闘を始めた……。

ヱヴァンゲリヲン新劇場版：破

ヱヴァンゲリヲン新劇場版：Q
2012年11月17日公開

14年の歳月を経て目覚めたシンジは、ミサトら元ネルフ職員が新たなクルーを加えて結成した反ネルフ組織“ヴィレ”の戦艦AAAヴンダーにいた。初号機から発見されたのはシンジひとりで、綾波レイはいなかった。だが、シンジ奪還のため急襲をしかけてきたEVA Mark.09からレイの声を聞いたシンジは、ヴンダーを去りネルフへと向かう。そこで出会った渚カヲルに導かれ、変わり果てた大地の姿を見たシンジは、レイを救済したことをきっかけに“ニア・サードインパクト”が起き、地球に甚大な被害を与えたことを知るのだった。

ヱヴァンゲリヲン新劇場版：Q

シン・エヴァンゲリオン劇場版
2021年3月8日公開

新たな劇場版シリーズの第4部であり、完結編。ミサトの率いる反ネルフ組織ヴィレは、コア化で赤く染まったパリ旧市街にいた。旗艦AAAヴンダーから選抜隊が降下し、残された封印柱に取りつく。復元オペの作業可能時間はわずか720秒。決死の作戦遂行中、ネルフのEVAが大群で接近し、マリの改8号機が迎撃を開始した。一方、シンジ、アスカ、アヤナミレイ（仮称）の3人は日本の大地をさまよい歩いていた……。

シン・エヴァンゲリオン劇場版𝄇

壊滅的な状況となった地球、そこに生き残った人々と、

「エヴァンゲリオン」に搭乗し、「使徒」と呼ばれる敵を殲滅する少年少女たち。

そして事態の陰にある「真実」を知る一人の男。

進行する「計画」を前に男は、贖罪と再生のため、世界の秘密を解き放つ。

聴こえてくるその「声」は、人々を覚醒させ、そして——。

Cast

渡守ソウシ
Soshi Tomori

霧生イオリ
Iori Kiryu

羽純ナヲ
Nawo Hasumi

叶トウマ
Toma Kano

光条・ヒナタ・ラファイエット
Hinata La Fayette Kojo

秋津希エリ
Eri Akizuki

桜井エツコ
Etsuko Sakurai

叶サネユキ
Saneyuki Kano

窪田正孝
Masataka Kubota

石橋静河
Shizuka Ishibashi

板垣瑞生
Mizuki Itagaki

永田崇人
Takato Nagata

坂ノ上茜
Akane Sakanoue

村田寛奈
Hirona Murata

宮下今日子
Kyoko Miyashita

田中哲司
Tetsushi Tanaka

マニピュレーター／記者／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Reporter / Mensch / Angels etc.
大植真太郎
Shintaro Oue

マニピュレーター／生徒／記者／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Student / Reporter / Mensch / Angels etc.
大宮大奨
Daisuke Omiya

マニピュレーター／記者／研究員／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Reporter / Researcher / Mensch / Angels etc.
渋谷亘宏
Nobuhiro Shibuya

マニピュレーター／看護師／研究員／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Nurse / Researcher / Mensch / Angels etc.
AYUMI
Ayumi

マニピュレーター／記者／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Reporter / Mensch / Angels etc.
森井淳
Jun Morii

マニピュレーター／記者／看護師／研究員／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Reporter / Nurse / Researcher / Mensch / Angels etc.
笹本龍史
Ryoji Sasamoto

マニピュレーター／記者／研究員／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Reporter / Researcher / Mensch / Angels etc.
渡邉尚
Hisashi Watanabe

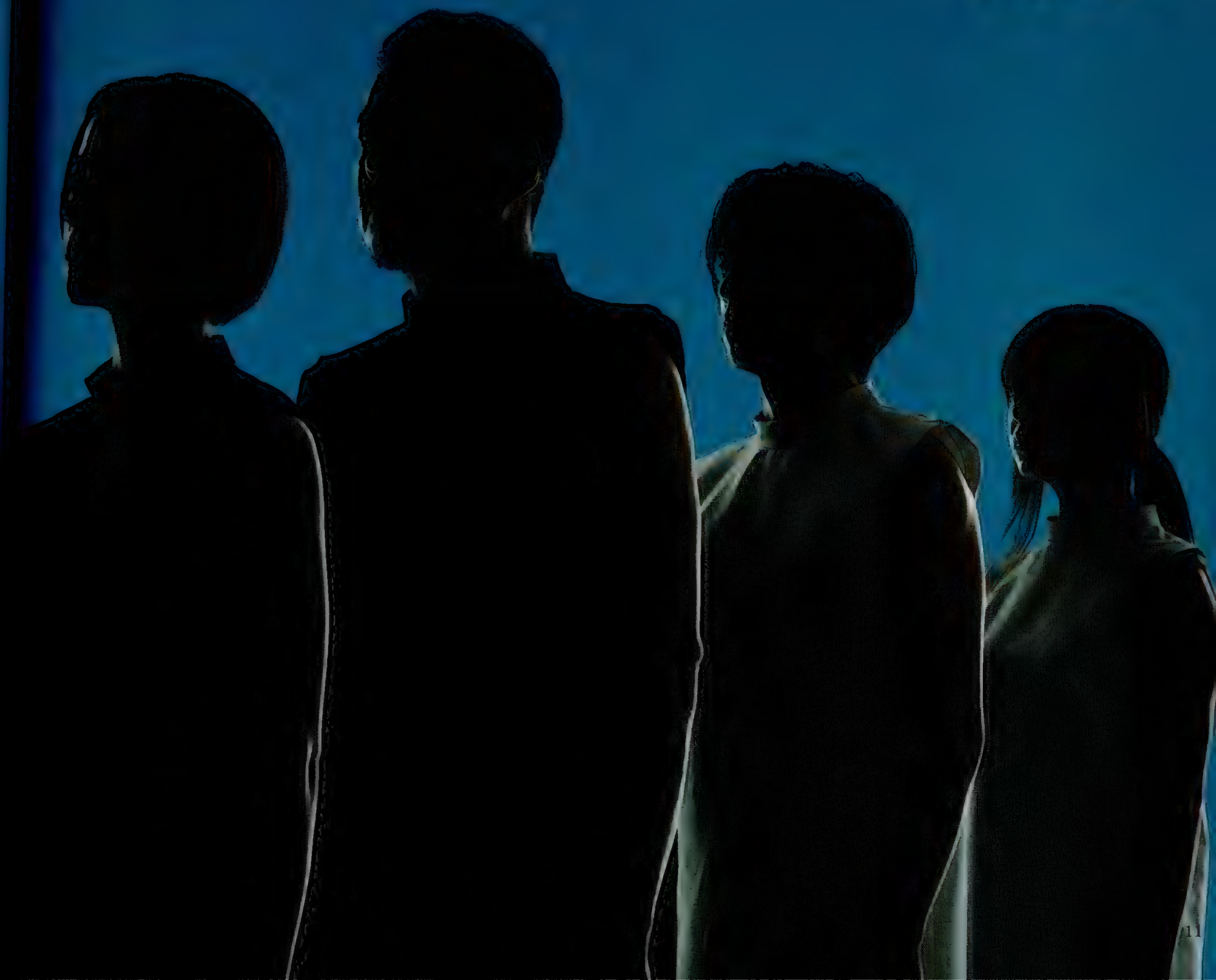
マニピュレーター／記者／先生／メンシュ／使徒 ほか
Manipulator / Reporter / Teacher / Mensch / Angels etc.
高澤礁太
Shota Takasawa

マニピュレーター／記者／生徒／研究員／メンシュ／使徒／マユ ほか
Manipulator / Reporter / Student / Researcher / Mensch / Angels / Mayu etc.
権田菜々子
Nanako Gonda

キャスター／生徒／メンシュ ほか
Anchor / Student / Mensch etc.
伊藤わこ
Wako Ito

生徒／記者／メンシュ ほか
Student / Reporter / Mensch etc.
大知
Daichi

タミ
Tami
山脇千栄（東京・長野公演）
Chie Yamawaki (Tokyo/Nagano)

阿部好江（大阪公演）
Yoshie Abe (Osaka)

余白のない時代だからこそ
余白のある作品に意味がある

今の大人たちは子供たちへバトンを渡すことができるのか。『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』はとても現代的なテーマが込められた作品だと僕自身解釈しています。

僕らは地球の恩恵を受けて生かされているのに、地球に返しているのはゴミや汚染、自然破壊ばかり。権力や支配に溺れ、争い続ける欲にまみれた人間たちで溢れかえっています。渡守の宿命だったのか、運命の悪戯だったのかはわかりませんが、負の連鎖を止めて調和された世界を次世代に残そうと奮闘する。トラウマや今までしがみついていたものを手放し、心を解放して責務を果たそうとする。

渡守の生き方は自分の心を代弁してくれている気がして、舞台はそれをストレートに表現できる場所でもありました。デジタルが加速してすべてが映像やインターネットに代わっていく時代だけど、あえてそこに抗い、今『エヴァ』を演劇でやる意味はあると、僕は思っています。正直、情報に埋め尽くされすぎて心に余白のある人が以前より少なくなった気がしています。だからこそこの作品に僕は余白を作りたいし、観てくださる方のなにかきっかけになればと思っています。演者と観客の余白が重なり合って新たな世界観や問いが浮かび、作品として初めて完成する気がします。先入観を捨て、目の前で起きることを自然な感覚で捉えていただけたら幸いです。

窪田正孝　**渡守ソウシ**

Masataka Kubota　　Soshi Tomori

1988年生まれ、神奈川県出身。2006年より俳優として活動を開始。第77回毎日映画コンクール男優助演賞、第46回日本アカデミー賞（最優秀助演男優賞）、第32回日本映画批評家大賞（助演男優賞）など受賞多数。近年の主な出演作品に【舞台】『唐版 風の又三郎』【映画】『ある男』、『湯道』【ドラマ】『ノンレムの窓 2022・秋「未来から来た男」』（NTV）、『アクターズ・ショート・フィルム3』（WOWOW）など。今年8月には出演映画『春に散る』、9月には主演映画『スイート・マイホーム』の公開が控えている。

この作品には伝えるべき真髄があると信じて

ラルビさんといつかお仕事がしたいと思っていたのが10年くらい前のこと。ダンスを志す者としていつかご一緒したいと思っていましたが、踊りを離れてお芝居の世界に入って。思っていた通りにではないけれど、確実に夢が叶ったことに不思議な感覚を覚えます。

今回の役割としてはお芝居が一番大事ですが、イオリには心情や台詞を歌や踊りで表現する場面もあって。演技を始めた頃はバレエでの身体の癖が抜けず、踊りを忘れようと離れた時期もありました。

でも最近は次第にいろいろな身体のあり方が表現できるようになってきたし、ラルビさんも勧めてくださるので、身体を使ったお芝居を見せることも楽しめたら。

劇中では古い価値観から抜け出せない叶に対し、イオリは葛藤しながら抜け出そうとする。自分が信じていた正義が覆されていくのを受け入れていく役なので、物語の始まりから終わりまで、変化が続くのが面白いですし、彼女の生々しい揺らぎを表現したいです。

この作品ではヒエラルキーの頂点には叶が、その下にイオリ、そして子供たちがいる。そんな男性社会の中で、人には制御しきれないエネルギーを使う弊害が描かれるなど、とても今にリンクした作品になっています。だからこそ表面的な設定や世界観だけでなく、この作品の真髄をご覧になる方々へ伝えたいと思っています。

石橋静河　霧生イオリ

Shizuka Ishibashi　　Iori Kiryu

1994年生まれ、東京都出身。幼少期よりクラシックバレエを学び、コンテンポラリーダンサーとしての活動を経て、15年に俳優としてROGO『銀河鉄道の夜2015』で初舞台。以降、舞台NODA・MAP『逆鱗』、初主演作品『映画 夜空はいつでも最高密度の青色だ』など、幅広いジャンルで活躍。第60回ブルーリボン賞（新人賞）、第28回日本映画批評家大賞（主演女優賞）など受賞多数。近年の主な出演作品に【舞台】木ノ下歌舞伎『桜姫東文章』【映画】『前科者』【ドラマ】『まんぞく まんぞく』（NHK BS4K・BSプレミアム）などがある。

板垣瑞生

羽純ナヲ

役の中にある真実
ただそれを伝えるために

この作品には、ラルビさんのやりたいことが含まれていますが、今や作品自体が生きものとして自立し、成長しているような感覚があります。日々変わっていく瞬発的な積み重ねを、本番でどう再現するかも考えなければいけないし、そのための論理を詰めていく作業も非常に面白いですね。

『エヴァンゲリオン』は世界観や設定がリアルですが、ラルビさんは『エヴァ』愛は深いけど、演者や観客に設定を押しつけるようなことはされません。だから稽古でも作品の本質が伝わってくるし、観客が自分と照らし合わせて観ることができる、アートとして自由度の高いものになると思います。

ナヲを演じると、誰かを守ろうとする人は、絶対にほかの誰かが守ってくれるのだなと感じます。人間は独りよがりな存在だけど、この作品はそれでも誰かを守ろうとする人を描き、肯定しようとしている。だから利己的な人が淘汰されていく話でもあるんです。

そして誰かを守るのは、自分のためでいいと僕は思います。ナヲもトウマが存在したから彼への感情を通して、自分を肯定できたのだと思うので。僕は彼を演じてその真実を伝えればいいし、それで誰かに元気や勇気を手渡せるならこの舞台に立つ意味がある。生身の人間による演劇は誰かを守ることができる。その事実を正面から演技でぶつけたいと思います。

2000年生まれ、東京都出身。14年に『闇金ウシジマくん Part2』で映画デビュー。以降、映画、ドラマを中心に活躍。16年に日本映画批評家大賞（新人男優賞）受賞。近年の主な出演作品に【映画】『ツーアウトフルベース』、『HiGH&LOW THEWORST X』、『アクターズ・ショート・フィルム３』【ドラマ】『デキないふたり』（EX）、『ヒル』（WOWOW）、『オールドルーキー』（TBS）、『ばかやろうのキス』（NTV）など。今冬に『正直不動産 スペシャル』（NHK）の放送が控える。

自分が『エヴァ』に感じたもの
それを観客に手渡したい

僕は映画やTVアニメの『エヴァンゲリオン』に庵野秀明さんの私小説的な要素を感じてきましたし、それらに触れることで、自分がこの地球に存在することを肯定してもらえた気がしていました。

今回の舞台はオリジナル作品ですが、ラルビさんが今、地球や世界について思うことが反映されている。ラルビさんが自身を作品にしていらっしゃるという意味で、映画やTVアニメへのアンサーになっているし、地球や世界といった大きなものと、個人の内面の両方が描かれているところも好きですね。『エヴァ』というフィクションを通して、現実をあぶり出すことに挑戦する作品だと思います。

トウマはとても繊細で、だからこそ自分を含め、すべてを俯瞰で見られる場所にいることになった人物。誰かに思われて登場することが多いので、彼の居方には誰がどのタイミングで思い浮かべたのかが重要ですね。この構造は舞台オリジナルですし、そこを踏まえた上で、トウマをどう表現するのかは、俳優として非常にチャレンジしがいのあるテーマです。

僕はこの舞台は人間の話だと思っています。ご覧になった皆さんがどう受け取ってくださるのかが楽しみな反面、怖さもあります。でも僕が映画やTVアニメから感じたように、自分自身を認める勇気が与えられるものにできたらと思います。

永田崇人　叶トウマ

Takato Nagata　Toma Kano

1993年生まれ、福岡県出身。15年より俳優として活動を開始。舞台、映像を問わず、幅広いジャンルで活躍している。近年の主な出演作品に【舞台】『ハイパープロジェクション演劇「ハイキュー!!」』シリーズ、『HOPE』、『パラダイス』、『バンズ・ヴィジット 迷子の警察音楽隊』【映画】『向田理髪店』【ドラマ】『ガンニバル』（Disney+）、『なにわの晩さん！ 美味しい美味しい走り飯』（ABC）、『私と夫と夫の彼氏』（TX）などがある。

生身の表現だからこそ
手渡せるなにかを探して

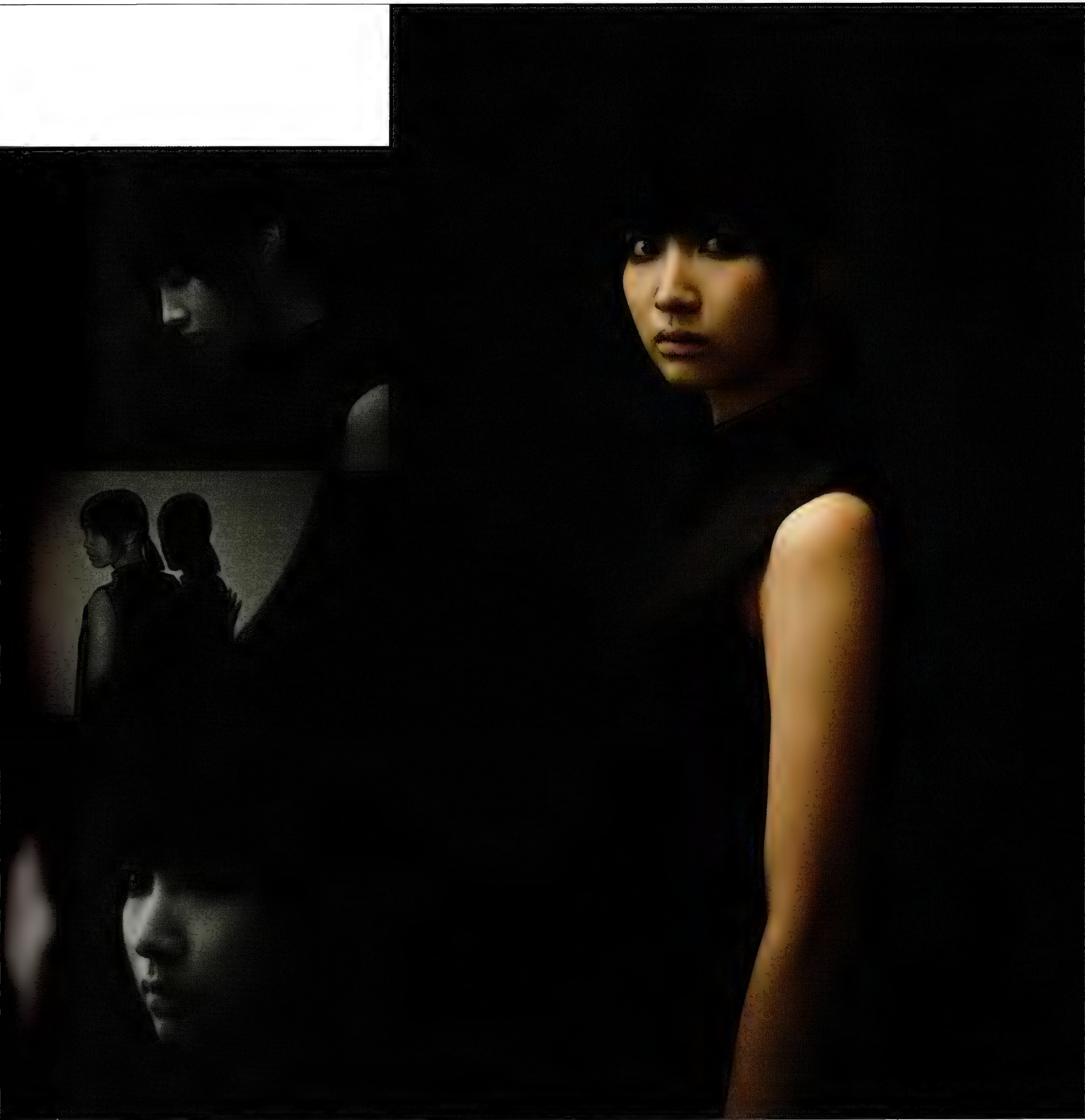
ヒナタは男勝りな性格で「とにかく男の子に負けたくない！」という思いが強いですね。自分が女性であることがアイデンティティになっていて、ライバルであるトウマに負けないよう、人一倍努力もしている。その反面、彼女には14歳の子供としてのもろさもあるので、強気に見える姿に潜む弱さを意識しながら、ヒナタの人物像を立体的に表現したいです。

彼女はトウマがいなくなった寂しさを表には出さず、「トウマがいなくても、自分はできる！」と思って使徒と対峙します。だけど最初の戦闘が終わっても先のことはわからないし、鬱屈した思いを抱いている。それでも今を生きようとするヒナタに、この作品に挑む今の自分を重ねることで、彼女の感情をより理解して、演技に反映できたらいいなと思っています。

ラルビさんはシーンごとにヒナタがなにを感じ、考えているのかを細やかに伝えてくださいます。その言葉があまりにも素敵で、心に響くので、時には涙ぐみそうになることもあるくらいです。

私たちは多くの方が愛する『エヴァンゲリオン』を舞台オリジナルとして表現しようとしています。私自身、一観客として舞台やライブを観るたび、生身の表現の力を感じてきました。アニメやコミック、映画版への尊敬の念とともに、私もご覧になる方々になにかをお伝えできるよう全力を尽くします。

坂ノ上茜　　光条・ヒナタ・ラファイエット

Akane Sakanoue　　**Hinata La Fayette Kojo**

1995年生まれ、熊本県出身。2009年に「アミューズ全国オーディション2009 THE PUSH ！マン」で俳優・ルックス部門賞受賞。15年にドラマ『ウルトラマンX』で女優デビュー。以降、映画、ドラマを中心に活躍を続けている。近年の主な出演作品に【映画】『愛ちゃん物語♡』、『BAD CITY』、『ぬけろ、メビウス!!』【ドラマ】『チア☆ダン』(TBS)、『監察医 朝顔』シリーズ(CX)、『私が獣になった夜』(ABEMA)、『ヒヤマケンタロウの妊娠』(Netflix)【TV】『王様のブランチ』(TBS)、『町中華で飲ろうぜ』(BS-TBS)などがある。

村田寛奈　　秋津希エリ

Hirona Murata　　Eri Akizuki

彼女の根本にある思い そこにいつも耳を傾けながら

私はこれほど大きな舞台に出演するは初めての経験なので、お声がけいただいたときは素直にうれしかったですし、同時に『エヴァンゲリオン』をどう舞台にするのだろう？　オリジナルストーリーでなにが起こるのだろう？　と期待が高まりました。

今はエリについてラルビさんやパイロットのみんなと相談しながら模索しているところです。エリにはおちゃらけた態度で本心を隠すようなところもありますが、彼女の根本には、地球を傷つけたくないという思いがあって。だからエヴァと人間が自然を破壊するたびに悲しみを感じるし、ラルビさんからも、その思いを大切にしてほしいとお話がありました。

14歳の少女を演じるという点に関しては先日、中学生とお仕事をする機会がありましたが、その際に感じた純粋さ、キラキラした疾走感を大切にしつつ、劇中のパイロットたちは背負う任務が重い分、大人びたところもあると思うので、そこも踏まえて演じたいです。

ラルビさんの演出では、セットに設けられた斜面を使って人物同士の関係性を表現するなど、空間を意識して演技を作る視点が興味深いですし発見があります。ファンの方の多い作品世界に携わることには緊張とプレッシャーを感じますが、自分になにができるのかを常に自問しながら、これからの稽古にも取り組みます。

1996年生まれ、兵庫県出身。ガールズパフォーマンスユニット9nineメンバーとしてデビュー。現在は女優を中心に活動中。2020年には短編映画『たまには、大きな声で』で初主演を務めたほか、主題歌・劇中歌の作詞作曲も担当した。近年の主な出演作品に【舞台】コンプソンズ『われらの狂気を生き延びる道を教えてください』【映画】『彼女来来』【ドラマ】『ソロモンの偽証』（WOWOW）、『ちむどんどん』（NHK）、『推しが武道館いってくれたら死ぬ』（ABC・EX）などがある。

変わりゆく彼女を 演技へ表出させるために

エツコを演じるにあたっては彼女の中にある感情を積み上げ、向き合う相手との関係性を含め、短いシーンでも、きちんと伝わるものがあるようにしたいですね。

彼女は叶をサポートしているけれど、自分の仕事をすべて正しいと思えているわけではありません。子供を戦いに赴かせることへの罪悪感、ほかに使徒に対抗する手段がない現実の間にいて、次第に叶に疑問を抱いていく。ただ『エヴァンゲリオン』の世界観は複雑だし、彼女の心理と台詞にも乖離があるので、そこを踏まえてエツコの変化をどう演技に表出させていくのか。そこが劇中での選択へと繋がるように演じたいです。

ただ正義は一つではないから、正義をめぐる齟齬や別れは、その後も繰り返されるでしょう。でも少しずつでもいい方向に進もうとするしかない。だから渡守はああした行動を取るわけですし、それに対するラストでのエツコの姿には、この作品にとってとても重要な意味があるのを感じます。

そしてこの作品では素晴らしいダンサーの方々が、言葉にはできない思いを踊りで表現してくださっていて。皆さんと一緒に作るシーンもありますが、その稽古が本当に楽しい。ラルビさんもご自分のイメージを言葉を尽くして伝えてくださるので、私もインスピレーションのもとになるものを、稽古で提示できればと思います。

宮下今日子　　**桜井エツコ**

Kyoko Miyashita　　Etsuko Sakurai

1975年生まれ、東京都出身。98年より演劇活動を開始。演劇とダンス、マイムが融合したフィジカルシアター要素を持つ舞台に多数出演。近年の主な出演作品に【舞台】劇団☆新感線『けむりの軍団』、イデビアン・クルー『義務』、『本日も休診』、ジャンル・クロスII『導かれるように間違う』、『野外劇 嵐が丘』、『広島ジャンゴ2022』、劇団温泉ドラゴン『悼、灯、斉藤』【映画】『108～海馬五郎の復讐と冒険』、『新宿タイガー』、『ヤクザと家族 The Family』などがある。

田中哲司　　叶サネユキ

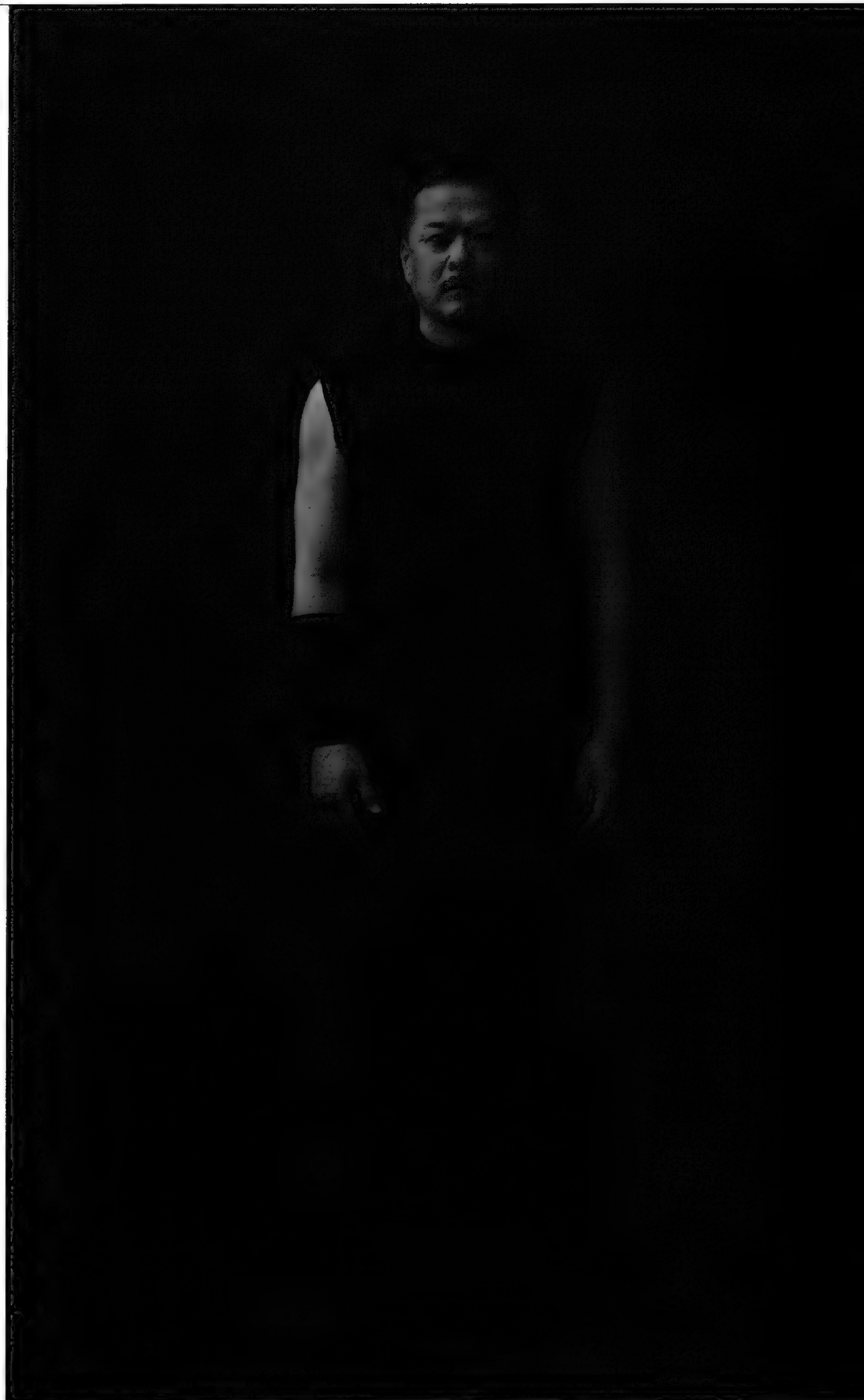
鋼のような彼の姿に反映されているもの

最初に今回の話を聞いたときは正直なところ、よく『エヴァンゲリオン』の舞台化を決意されたなと思いました。でも2018年に『プルートゥ PLUTO』を観て、作品をまとめ上げる力量に感嘆したので、ラルビさんの演出ならば、そこに身を委ねてみたいと思いました。

実際に稽古が始まってみて感じるのは、この作品の根底にあるのは人間の力であり、そこに『エヴァンゲリオン』を演劇にする意味が詰まっているということですね。

叶は目的のためには手段を選びませんが、その程度を稽古で模索しています。今のところは極力、人間的な要素を削ぎ落とした、鋼鉄の男という方向性でしょうか。

僕はこれまで感情豊かな役を多く演じてきたし、こうしたキャラクターは、映像ならば成立させやすいけれど、舞台ではそこをどう明確に見せるのかが難しい。自分としても挑戦というところがありますね。なにしろ叶は舞台上でよろけたりつまずいてもダメという不動の男なので（笑）。

叶が手をのばすもの、僕はそこに原発をイメージするんです。今はしのげていても明確な未来は見えない。暮らしは豊かになったけど、電力が供給され続けなければその豊かさは維持できない。もうあとには引けない、だから科学者として突き進むしかない。叶の姿には、今の世界が如実に反映されていると感じています。

1966年生まれ、三重県出身。90年に日本大学芸術学部演劇学科を卒業。白井晃、赤堀雅秋、長塚圭史を始めとする演出家の舞台作品に出演。映像作品でも幅広く活躍する。『RED レッド』の演技により第50回紀伊國屋演劇賞（個人賞）受賞。近年の主な出演作品に【舞台】『近松心中物語』、『ケダモノ』【映画】『余命10年』、『シン・ウルトラマン』【ドラマ】『真犯人フラグ』（NTV）、『石子と羽男ーそんなコトで訴えます？ー』（TBS）、『らんまん』（NHK）など。劇場版『緊急取調室 THE FINAL』が今年6月16日に公開予定。

大植真太郎 Shintaro Oue

A2 ラルビが創る道標（ナビ）を聞き間違えない！ 尚且つ周りのダンサーそして俳優陣の意見やアイデアに、自分の声（創作し形にする）をも重ねる。A3 彼の演出並びに振付は、ダンサーや役者がチェスの駒のように動かされるかのようである。ダンサー陣は駒でいうとビジョンであり統制と突飛な一歩目で先陣を切り、時々、ビジョンを忘れさせてもくれる場面もある。チェスでありながらチェスでないよと盤をひっくり返してくれる振付家だと私は思っている。

17歳で渡独、ローザンヌ国際バレエコンクールでキャッシュプライス受賞。ドイツ（ハンブルグバレエ団）、オランダ（NDT）、スウェーデン（クルベリーバレエ）などで活躍、30ヵ国以上のステージに立つ。振付家としてハノーバー国際振付コンクールで最優秀賞、スカンジナビアグランプリ賞など受賞多数。本作では振付助手を務める。

大宮大奨 Daisuke Omiya

A2 多数意見が増える情報社会の中、他の意見に取り込まれないように自分の軸をしっかりと持ち、根を張り巡らせ、根から広がる自身の繋がり有る人達を大切にし、声を聞きたい。A4 久しぶりの大所帯の舞台作品。一つの作品を作ることはとても大変です。意思疎通できるのは人間の大きな力ですが、また難しいのも事実。一期一会ではあるが、この瞬間を大切な仲間と作る喜びを感じて挑んだ作品です。

18歳よりNYを拠点に活動。インターナショナル・ダンス・フェスティバル（イタリア）優勝、ジェイディン・ワン・アワード（アメリカ）優勝。『2020年東京オリンピック競技大会』開会式では振付を担当。現在松本市四賀地区にアート施設CAVAMMを設立。地域の文化交流を生み出す活動を行う。

渋谷亘宏 Nobuhiro Shibuya

A2 自分の内なる声には耳を傾けるようにしています。すぐに周りの目を気にしてしまい、基準が自分以外となってしまうので、日常的に自分の声を聞くようにしています。その方が踊りも良くなりますしね。A3 ラルビは、ダンサーに愛を持って接してくれているので一緒に仕事をするのは楽しいです。クリエイションでは、言われたことの5倍くらいを返すことをラルビは求めているので、ラルビを通して新しい自分を発見させてもらっている感じです。

大学在学中にヒップホップと出会い、DJの道へ。その中でダンスを始め、卒業後にコンテンポラリーダンスを始める。ダンサーとして『プルートゥ PLUTO』に出演するなど国内外で活動。独自の身体性が認められシルク・ドゥ・ソレイユにアーティスト登録。コンサートやMVなどの振付も行い、振付作品は海外でも受賞多数。

Q3. 演出面を含めたラルビの印象。 Q4. この作品に参加することへの思い、お客さまへのメッセージ。

AYUMI　Ayumi

A3 ラルビさんはダンサーを“踊る人”だけでなく、芝居もして人形や舞台セットも操作して、ダンサーが触れるものを踊らせる事によって作品に躍動感を与えていて、とても勉強になります。A4 ダンサーは、一つの役をやるというよりは、少しずつ様々な役をやるので、身体の使い方や仕草などの変化のつけ方に注目して、楽しんで頂けたら嬉しいです。

身体からあふれるエナジーと躍動感を持ち味に、自身の感性と音楽を融合させる、独自のスタイルを持つダンサー。鋭敏なセンスと身体能力の高さによりコンテスト、ダンスバトルに多数入賞。さらに国内外での審査員、ワークショップ開催、TV、ショーや舞台作品への出演など、さまざまなシーンへ活動範囲を広げている。

森井淳　Jun Morii

A3 ラルビは何よりも頭の回転と判断が早く、また動き全般に対しての的確な分析と再現力の高さや視野の広さは一緒にワークしているとものすごく勉強になる、本当にリスペクト出来る方です。A4 この作品を見た人にとって記憶に残る、何かを考えるきっかけになるものであれば嬉しいです。また舞台におけるダンサーの重要性や必要性、表現者としての可能性を提示出来れば幸いで、ダンサーが今以上に様々な分野で活躍できるきっかけになれば最高です。

大学で舞踊に触れ、LABAN CENTRE LONDONにてDiploma取得。世界的な振付家とのワークのかたわら、ダンス講師や振付など多岐に活動。2021年より、プロダンスのD.LEAGUEへ参入したLIFULL ALT-RHYTHMのアシスタントディレクター兼ダンサー。ラルビ作品には18年の『プルートゥ PLUTO』に続いての参加。

笹本龍史　Ryoji Sasamoto

A2 娘の声です。日常に流されると、ふと聴けていなかった自分に気がつく時があります。相手も自分も当たり前にそこに居ますが、劇中の子供達の様な子供もいると思います。耳を傾けたいと想える人が居る事にも感謝です。A3 ハッとさせられたり、息を呑む様な瞬間が、リハーサル中何度もありました。でもそれは少しでも何かが噛み合わないと消えてしまうものでもありました。繊細さと大胆さ、それと人を和ませるチャーミングさを持つ人です。

在米中にニューヨークを代表する数々の振付家のプロジェクトに参加。ニューヨーク・タイムズ紙などメディアに取り上げられ、2012年にニューヨーク・ダンス＆パフォーマンス・アワード（ベッシー賞）で傑出したパフォーマー賞受賞。現在は拠点を山口県に移し、田村真樹子とともにMETHOD B STUDIOを立ち上げている。

渡邉尚　Hisashi Watanabe

A2 身体の声です。あんまり社会的に振る舞い過ぎると、身体の声が聞こえなくなってしまう。何かやらなければいけないことがあっても、身体がストレッチを望むならそのまま続けるようにしてます。A4 小学生の頃から大好きで何度も観た『エヴァンゲリオン』。そんな作品にこの身体を使って関われるようになるなんて想像したこともなかったので正直とてもラッキーだと思います。それにラルビの創作過程を内部から知れるのも、とても勉強になってます。

身体研究家、サーカスアーティスト。20歳から独学でジャグリング、倒立、軟体芸を始め、ダンスやサーカスの枠を越えて活動。独自の身体性と哲学を反映した作風が評価され、今までに20ヵ国以上で出演や指導をする。倒立やストレッチの普及にも力を入れており、2023年には日本初の倒立フェスティバルを開催予定。

高澤礁太　Shota Takasawa

A3 モノの本質の見方…“深い”部分を常に大切にして、繊細な部分まで役者にもダンサーにもしっかりと伝えてくれる。素晴らしい部分がありすぎて語りきれません。A4 自分の実名でもある“しょうた”から、ショウタ先生というなんともありがたい役をやらせて頂いています。是非そこにも注目して頂けるとありがたいです。ラルビが創り上げる『エヴァンゲリオン』の世界を通して、私達の身の回りで起きている大切なコトに気付いて頂けると思います！

芝居のほか、殺陣、アクション、アクロバット、ブレイクダンス、パルクール、コンテンポラリーダンス、ジャズダンス、トリッキングも得意としている俳優。近年の主な出演作品に【舞台】『ニンジャバットマン ザ・ショー』、『歌妖曲〜中川大志之丞変化〜』などがある。

権田菜々子　Nanako Gonda

A3 稽古前に、いつもにこやかに声をかけてくださる優しい方です。アドバイスの際には必ず先に「良かった点」から説明し、改善点も的確なので、気持ちが落ち込み過ぎず前向きに稽古に取り組むことができています。A4 誰もが知るアニメから生まれた大舞台への出演は初めてなので、カンパニーの皆様に支えて頂き、多くの気付きと学びの日々です。壮大な舞台セットの中で役名も頂けてパフォーマンスできる事、今は緊張と嬉しさでいっぱいです！

2015年チアダンス世界大会団体準優勝、16年全日本大会ダブルス・団体の2部門で優勝。近年の主な出演作品に【舞台】ももクロ一座特別公演『姫はくノ一』【イベント】『2020年東京オリンピック競技大会』閉会式など。地元福岡と関東近郊で、チアダンス講師として後進育成に努める。

伊藤わこ Wako Ito

A3 ラルビさんは、とにかくこだわりが強い。でもそれは、作品を愛するからこそだと思います。熱心に役者と話すラルビさんの姿をたくさん見かけました。そんなラルビさんが作るこの作品がどのようにお客様に届くのかとても楽しみです。A4 本日はご観劇、プログラムのご購入ありがとうございます。記念すべきこの公演に参加できることを本当に嬉しく思います。スウィングという立場を全うし、たくさんの方にこの作品が届くことを心から祈っています。

1997年生まれ。福島県出身。渡辺ミュージカル芸術学院1期卒業生。クラシックバレエを武器に、さまざまな舞台で活動している。近年の主な出演作品に【舞台】『ヴェラキッカ』、望海風斗 20th Anniversary ドラマティックコンサート『Look at Me』、『モノノ怪〜化猫〜』などがある。

大知 Daichi

A2 うちで一緒にくらしている犬の声です。特に朝イチと帰宅した時の「お腹が空いてます！」という声（主張）。ご飯を食べたら次は「遊んで！」。…聞き逃したくはないというより、聞き逃がせない、ですが（笑）。A3「観る力」がすごいです。一つのアクションから引き出す情報の量が何倍にもなっていて、どれも鋭い。そしてとても情熱的な方だなと。あとは、意外とお茶目！　よく冗談を言って和ませてくれます。

2001年生まれ、東京都出身。22年、猿之助と愉快な仲間たち『森の石松』で初舞台を踏む。以降、同ユニットの全作品に出演している。近年の主な出演作品に【舞台】劇団チョコレートケーキ『〇六〇〇猶二人生存ス』、二月花形歌舞伎『新・三国志 関羽篇』、猿之助と愉快な仲間たち『ナミダドロップス』などがある。

山脇千栄　Chie Yamawaki

A3 ラルビさんは、いつも優しくタミという人物の真髄を教えてくださいます。太鼓打ちと役者の間にある垣根を乗り越えて、演技にも初挑戦させていただきました。A4 作品を作るにあたり、森羅万象の声に向き合い、日本古来の音楽や言葉にヒントを得ながら、太鼓や唄で表現していきました。この作品に込められた想いを、音に乗せて、物語の世界観をより一層深くお届けできたら幸いです。

1993年生まれ、香川県出身。地元のチームで太鼓を始め、看護学校を卒業後、2015年に鼓童文化財団 研修所へ入所。18年より正式メンバーとなる。舞台では主に太鼓、笛、唄を担当。とくに唄には熱意をもって取り組んでおり、20年の『鼓』では「この峰の」、21年の『童』では「いのち」を唄い、情感ある歌声で観客を魅了している。

阿部好江　Yoshie Abe

A1 キャスト一人ひとりの動きや舞台セットの全てが動く芸術作品のように感じます。そして、セリフの端々には、今を生きている私達に問いかけるような言葉がたくさんちりばめられていて、心に響く作品だと思います。A2 子どもの心の声です。子どもは正直なようでいて、大人や環境によって本当のことを言えなくなる気がしています。そうならないような存在でありたいです。

1980年生まれ、東京都出身。太鼓芸能集団鼓童副代表。1999年に鼓童文化財団 研修所に入所。2002年よりメンバー。09年から10年にかけてアクラム・カーン『Gnosis』の世界ツアーに参加。和太鼓のみならず歌、演技にも才能を発揮し、ローレンス・オリヴィエ賞及び、英国舞台批評家協会賞にノミネート。世界的なアーティストとの共演も多い。

太鼓芸能集団　鼓童

photo Takashi Okamoto

太鼓を中心とした伝統的な音楽芸能に無限の可能性を見いだし、現代への再創造を試みる集団。「鼓童」とは、人間にとって基本的なリズムである心臓の鼓動から音（おん）をとった名前で、大太鼓の響きが母親の胎内で聞いた最初の音（心音）を想起させることによる。「童（わらべ）」の文字には、子どものように何ものにもとらわれることなく無心に太鼓を叩いていきたいという願いが込められている。

新潟県佐渡ヶ島を本拠地に、1981年にドイツのベルリン芸術祭でデビュー。以来53の国と地域で7,000回を超える公演を行う。なかでも、多様な文化や生き方が響き合う「ひとつの地球」をテーマとした「ワン・アース・ツアー」は、世界各地で4,200回を数える。小中高校生との交流を目的とした「交流学校公演」の実施、1988年より佐渡市と共に開催する国際芸術祭「アース・セレブレーション（地球の祝祭）」では、国際交流や地域振興への寄与が高い評価を得ている。ワールドミュージック・クラシック・ジャズ・ロック・ダンスパフォーマンスほか異なるジャンルの優れたアーティストとの共演や、世界の主要な国際芸術祭、映画音楽などへ参加も多数。2001年に日本人アーティストとして初めてノーベル平和賞コンサートへ出演。歌舞伎俳優で人間国宝でもある坂東玉三郎氏とは「アマテラス」はじめ数多くの作品を生み出し、2012年より2016年まで芸術監督に招聘している。

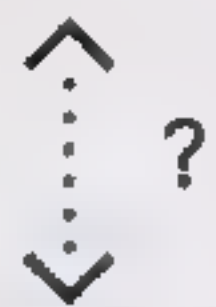
【設定解説】『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』の世界

特務機関メンシュ ロゴマーク

MENSCHとはドイツ語で人類を意味する単語。ロゴマークはレオナルド・ダ・ヴィンチのドローイング『ウィトルウィウス的人体図』をモチーフとする。さらに詞章として古代ギリシアの哲学者プラトンの言葉、The first and best victory is to conquer self.（最初にして最大の勝利とは自分自身に打ち勝つことである）があしらわれている。

特務機関メンシュ組織図

［総司令］
叶サネユキ
エヴァンゲリオン計画の立ち上げから関わり、使徒殲滅のために活動する。

?

渡守ソウシ
世界の真実を知る男。パイロットたちが通う学校に臨時教師として勤める。

［戦術作戦部］
霧生イオリ
戦術作戦部のトップ。対使徒戦闘での指揮に加え、パイロットのケアも担当。

［技術開発部］
桜井エツコ
技術開発部のトップ。機体運用だけなく、パイロット関連の計画にも関わる。

［エヴァンゲリオンαパイロット］
叶トウマ
叶の息子。これまでの戦闘ではエースとして活躍。

［エヴァンゲリオンβパイロット］
光条・ヒナタ・ラファイエット
ユーロ支部から転属。トウマにライバル心を燃やす。

［エヴァンゲリオンγパイロット］
羽純ナヲ
なにかと助けてくれるトウマのことを慕っている。

［エヴァンゲリオンδパイロット］
秋津希エリ
チームに加わったばかりの新人パイロット。

●隕石の衝突と使徒の出現

群馬県で隕石衝突とされる大爆発が発生。その衝撃により地表には直径1キロメートル程度のクレーターが形成され、周囲に甚大な被害をもたらした。

現地で被害者の救出と避難が行われるのと同時に、災害調査委員会が発足。現地調査を行った委員会による最終レポートでは、分裂した彗星の一部が落下したことによる隕石災害と断定。さらにクレーター内に残された隕石を分析した結果、地球外のものと思われる生命体を複数発見。メンシュの発表によりのちに「使徒」と呼称されることになる。

さらなる分析の結果、使徒に現代科学では説明不可能な形態進化が確認されたため、将来起こりうる使徒の脅威に備え、政府は特務機関メンシュの設立を決定。

同機関総司令として叶サネユキが着任。予測される使徒襲来に備えた防衛、並びに使徒殲滅を目的に「エヴァンゲリオン計画」を発動、来たるべき日に備えることとなった。

●新東京第三開発特区の成立

一方、復興を急いだ政府は、被災地を新東京第三開発特別区域に指定。将来、使徒の襲撃を受ける可能性を考慮し、メンシュ本部を設置する。こうして同地はエヴァンゲリオン計画を推進する研究拠点として、そして「使徒迎撃専用要塞都市」として、大規模な再開発が進められた。

さらに同地はメンシュと繋がりを持つ中学校が設置されるなど、学園都市的な性格も持つことになった。

こうして新東京第三開発特区に膨大なリソースが注ぎ込まれたが、この事件以降、強大化する自然災害により、日本列島の荒廃は進行。多くの人々は、限られた生存可能な地域に身を寄せ合って暮らすようになっていた。

そして、増大する災害エネルギーを吸収して形態進化を遂げた使徒は、ついに巨大な敵となって出現。対抗してエヴァンゲリオンが実戦投入、ここに人類と使徒による、決戦の幕が切って落とされたのである。

●特務機関メンシュの設立

特務機関メンシュでは、叶が過去行っていた先行研究をベースにして、対使徒兵器の研究開発に着手。それがエヴァンゲリオン計画である。さらに研究開発と並行して組織の整備も進められた。

当初は技術開発部が発足。のちには桜井エツコも加わり、エヴァンゲリオンについての基礎研究、量産機の開発が行われた。

量産機が運用されるようになるとさらなる研究開発に加え、量産機の運用・整備を担当。エツコが同部の責任者を務める。

また、エヴァンゲリオンの運用開始に伴い、新たに戦術作戦部が新設された。同部の責任者を務めるのは霧生イオリ。エヴァンゲリオン出撃の際は、パイロットと交信を行い指揮を執る。戦術作戦部には現在叶トウマ、光条・ヒナタ・ラファイエット、羽純ナヲ、秋津希エリの四人がパイロットに所属している。

●新東京第三開発特区を襲う使徒

隕石衝突とされる大爆発事故をきっかけに、現れる使徒。彼らは自然災害のエネルギーによって形態進化し、それぞれ風・水・火・大地の属性を有する。メンシュの分析により風の使徒ラファエル、水の使徒ガブリエル、火の使徒ミカエル、大地の使徒ウリエルの存在が確認されている。

火の使徒ミカエル
デザイン：松岡象一郎

デザイン：松岡象一郎

エヴァンゲリオンα
属性：風
機体色：コッパー（銅）

エヴァンゲリオンβ
属性：火
機体色：ゴールド（金）

エヴァンゲリオンγ
属性：水
機体色：チタン

エヴァンゲリオンδ
属性：大地
機体色：シルバー（銀）

●エヴァンゲリオンの開発と運用

エヴァンゲリオンの開発はメンシュ設立以前、叶を最高責任者として進められていたプロジェクトに遡る。そのプロジェクトで使用された「アダムカプセル」などの先行研究に加え、被災地に生まれたクレーターを調査した際に得られた知見をもとに開発は進行。パイロットの確保も含め開発は困難を極めたが、11年の歳月を経て、エヴァンゲリオンαが完成。その後、エヴァンゲリオンβ、γ、δが完成し、現在は四機体制で運用。各機体は同一ではなく、それぞれタイプがある。パイロットはαが叶総司令の息子である叶トウマ、βがユーロ支部より転属した光条・ヒナタ・ラファイエット、γが羽純ナヲ、δを秋津希エリが担当。パイロットにCSブレスレットが支給されており、メンシュ本部との連絡や緊急召集の通知は、このブレスレットによって行われる。

プラグスーツ

プラグスーツにはトウマ、ヒナタ、ナヲ、エリのそれぞれで、異なるカラーリングが採用されている。

デザイン：羽石輝

作品世界を形作るパペット製作現場探訪

シディ・ラルビ・シェルカウイが語るように『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』では、演劇ならではの手法でSF世界を表現。エヴァンゲリオンや使徒にもパペットなどを使用している。そこで使用されるパペットがどのように製作されているのか。工房と稽古場での様子を紹介する。

①工房に吊り下げられているエヴァのパーツ。指定色を塗装し乾いたところで組み立てられる。

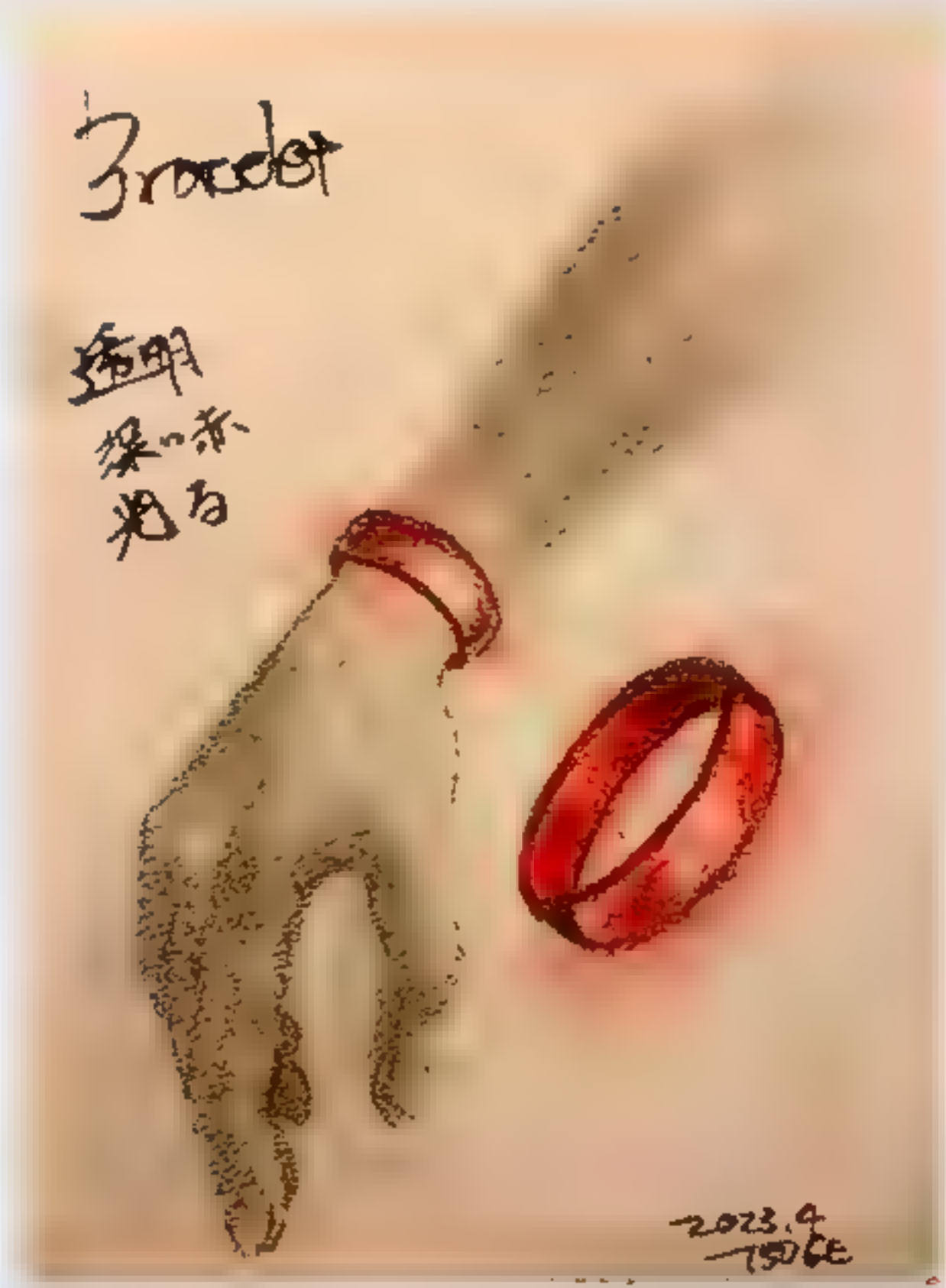
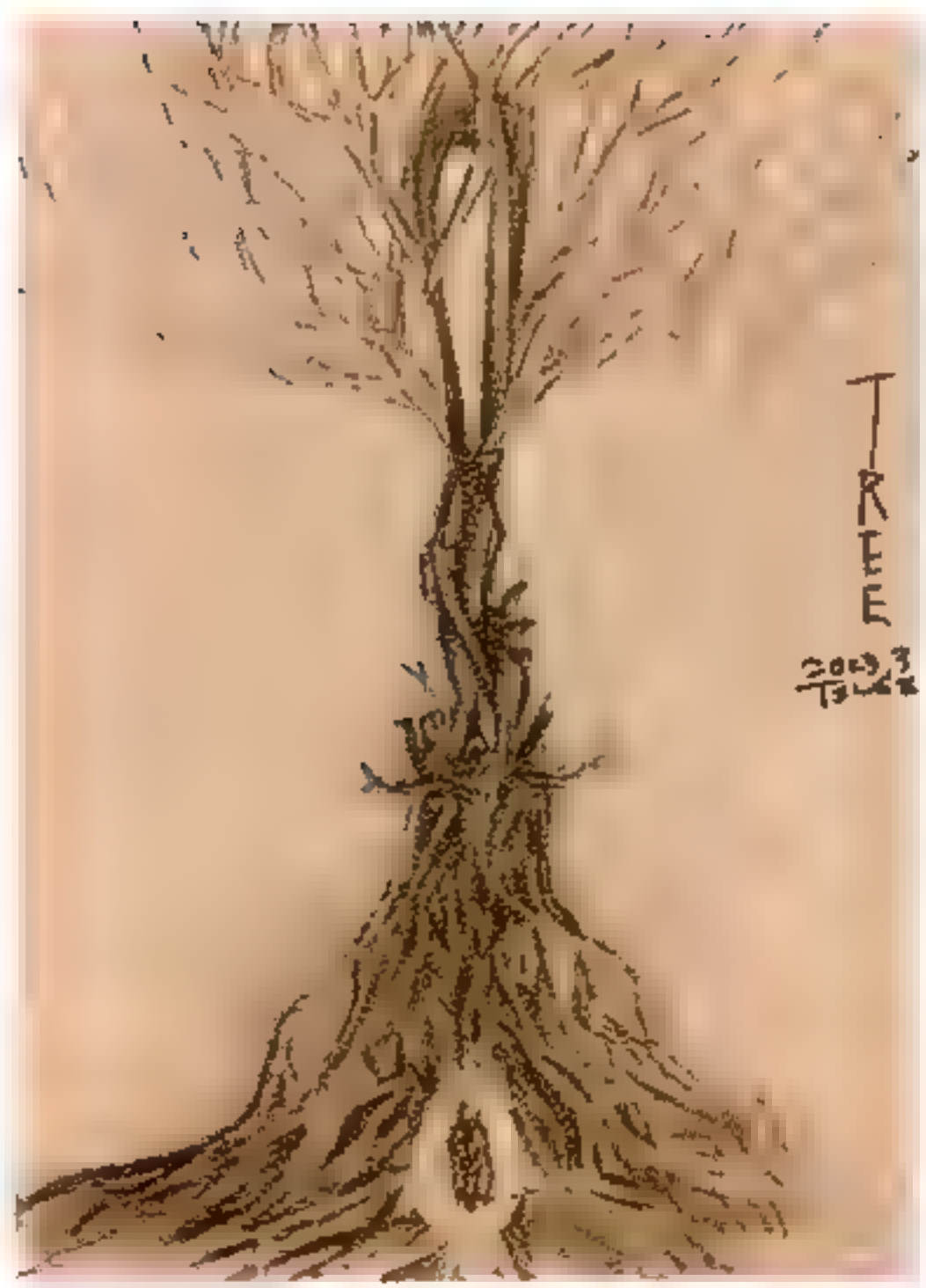
②組み立て中のパーツ。繊細な動きを実現するため、細心の注意を払って作業が進められる。

①②③⑤デザイン：松岡象一郎
④造形：アトリエデコール田中孝尚

③作成中のエヴァ頭部パーツ。各機の個性を表現するために、ディテールが作り込まれている。

④水の使徒ガブリエルの大型パーツ。劇中のイメージに合わせ質感や色味にこだわり製作された。

⑤製作中のパペットは稽古場でダンサーが試用。調整・改善点などを反映した上で完成させる。

CSブレスレット

Controllable System Bracelet（制御可能なシステムブレスレット）、通称CSブレスレット。メンシュ本部との通信機能のほか、装着者の生体情報や使徒接近によるエネルギー反応を示す機能を有する。エヴァンゲリオンのパイロットは、このブレスレットの装着が義務づけられている。

[INTERVIEW]

『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』とはなにか？ その問いを自身に投げかけながら

柘植伊佐夫

（ビジュアルディレクション／衣裳デザイン）

『プルートゥ PLUTO』(15年・18年)でご一緒した際、世界的な振付家であるラルビさんのイマジネーションと、それを形にしていく過程に感動したのを覚えています。今回は『エヴァンゲリオン』の舞台化という途方もない壁。この挑戦に魅力を感じました。

まず求められたのは、プロットや箱書きの段階からさまざまなイマジネーションをラルビさんに投げかけ、コンセプトを見出していくお手伝いをすること。従って話は人、人型、関係するイメージにまで及びました。具体的なデザインや技術的な領域をチームと共有しながら、『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』とはなにか、という問いへの答えを互いに探していたように思います。

私の務めはビジュアルディレクターとして使徒、エヴァ、この二つの根源、命と惑星、人……といった要素を視覚的に観客へ無理なく伝えること。そして本作がオリジナルストーリーとして制作されると決まってから、熱狂的な『エヴァンゲリオン』ファン（私自身も含め）にご納得いただくには『エヴァ』の根源に触れ、それを換骨奪胎する必要がありました。

ラルビさんは哲学的な観点から四元素に着目していました。それはたとえば火・風・水・土であり、それに応答するプラトン立体の正四面体・正六面体・正八面体・正二十面体。正十二面体はエヴァのプロトタイプに当てはめています。

また、文字通りのエンジェルであるミカエル、ラファエル、ガブリエル、ウリエルなどを形にするにあたっては、哲学と宗教の結節点を探りました。そこで四元素に加え五行思想に着目し、エヴァが最後に昇華して5番目のエレメントになるのがいいだろうと感じました。それが劇中のTREEであり、それは命の象徴となっています。

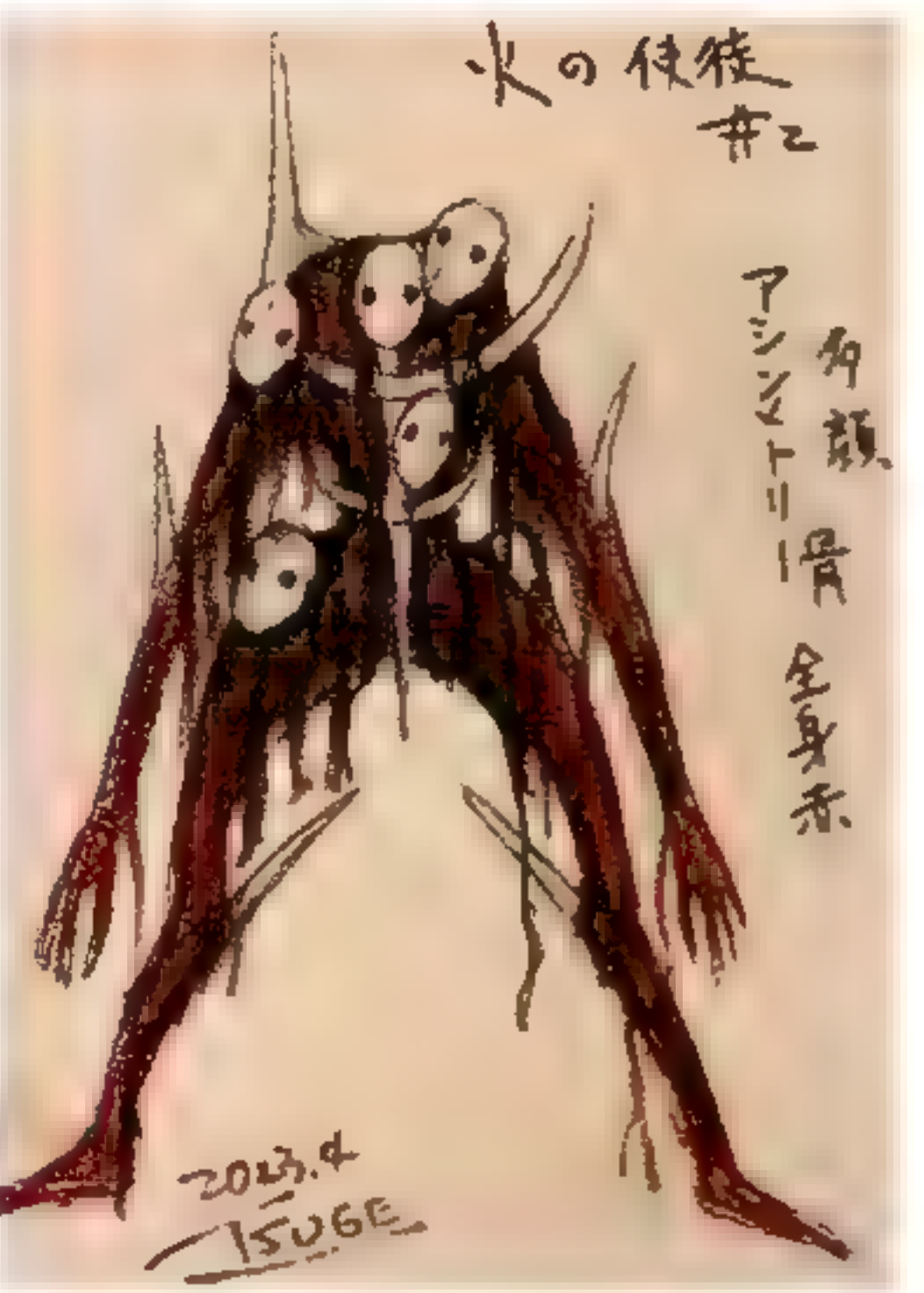
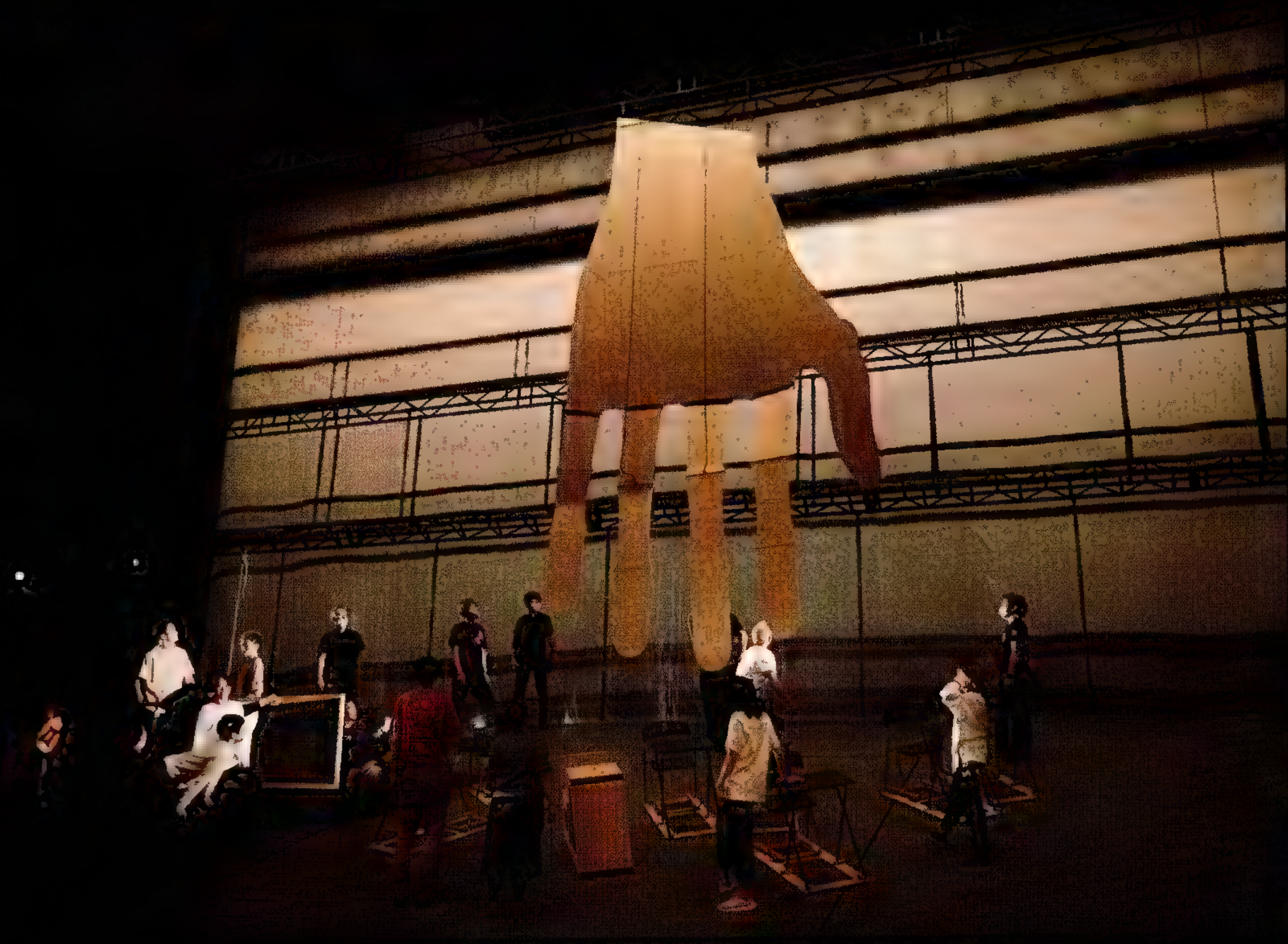
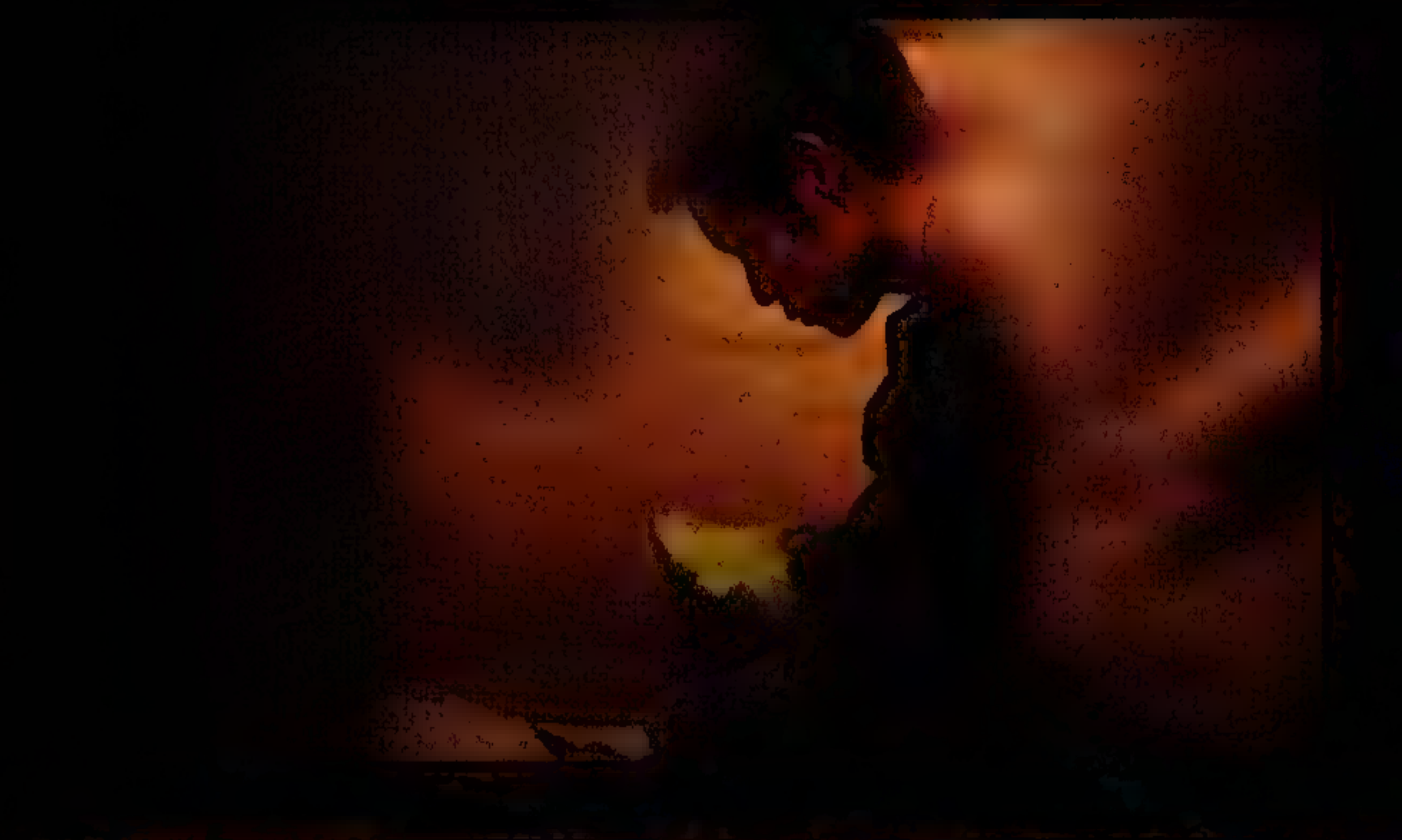
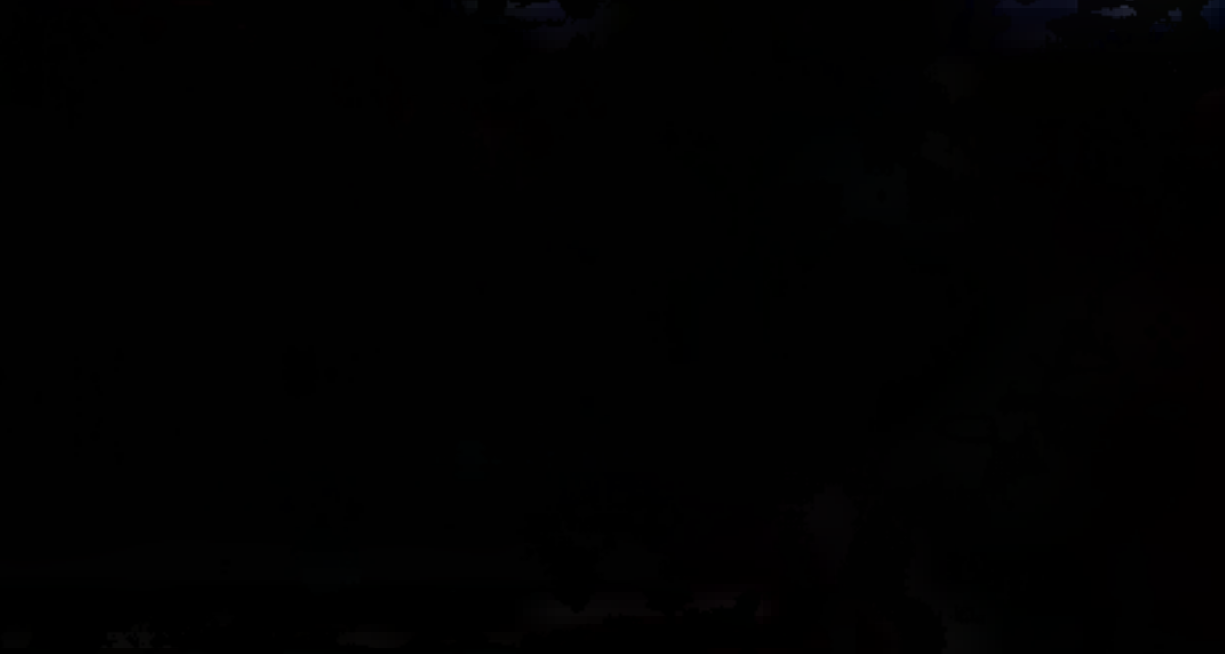
さらにラルビさんは地球内部の鉱物にも着目。本作でのエヴァの機体は当初、さながら未来のフランケンシュタインのように原作の機体を分解、再構築する方向で考えていました。しかし最終的にこのアイデアを捨て、地球内部にある鉱物の色に機体色を変更しています。プラグスーツも紆余曲折を経て劇中の形にまとまりましたが、それも哲学や宗教、自然科学の柱に基づき構築されています。

もう一つ重要なのはエヴァという存在に、新しいイメージを生み出すための具体的なヴィジョンです。それが鬼でした。エヴァの素体は拘束具に押し込められていますが、本作ではその素体に生命の源泉、その伝承として鬼をオーバーラップさせました。

登場する組織もMENSCH（メンシュ）はどこか人類補完計画を想起させるものがあり、そして声という意味のSTIMME（シュティメ）は希望を象徴しています。

私は映画『シン・仮面ライダー』(23年)を始め、4作品で庵野秀明さんとご一緒していますが、庵野さんとラルビさんのお二人に共通する印象は、沈思黙考、他者の意見に耳を貸す、限界を決めずに粘るなど、創作への超人的な執着といったものです。偉大なクリエーターとご一緒するのは緊張が伴うものですがお二人へは不思議とシンパシーを感じられます。今回このような機会をいただけたことを深く感謝いたします。

柘植伊佐夫
Isao Tsuge

※プロフィールはP56参照。

From Rehearsal Room

［座談会］窪田正孝×石橋静河×宮下今日子×田中哲司

大人という役どころから、『エヴァンゲリオン』という「神話」に向き合うことになった四人の俳優たち。
舞台上に有機的に立ち上がる、大きなうねりを表現するために今、彼らが考えていることとは？
佳境に突入した稽古の中で模索しているもの、そして感じつつある手応えについて語り合ってもらった。

役同士の関係性を超えた、大きな表現を

――お稽古も徐々に進んでいっていると思いますが、雰囲気のほうはいかがですか？

田中　今日子さんはエツコを演じるんですけど、叶を演じる身としては、エツコだけは仲間だと思っていたんです。ところが稽古が進んでみると「あれ⁉　一人？」と思って。

宮下　私もエツコは叶寄りで、コンビなのかなと思っていたんですけどね（笑）。

田中　だから今は、一人ぼっちの孤独感に苛まれています（笑）。

窪田　まぁまぁ（笑）。ストーリー的には僕らは叶の対岸にいることが絶対必要なんですけど、哲司さんは一人でも、僕らを大きく受け止めてくださる。だからこちらも思い切りぶつかっていけますね。

田中　叶が弱いとぶつかりがいがないだろうからね。衣裳にも助けてもらって鎧をまとって演じてみようかな、と。

石橋　叶は一人の人間というより、世界を牛耳る存在のメタファーのような気もしますよね。ほかのキャラクターにもなんらかのメタファーという部分はあると思うんですが、とくに叶はその要素が強いというか。

田中　だからその分、個人的には信頼できる味方が欲しいですね（笑）。

窪田　でも、劇中で「代わりはいくらでもいる」とか言っちゃってますからね。

田中　そうか……。人の上に立つ人は、やっぱりそんなことを言ったらダメだね……。

窪田・石橋・宮下　（笑）。

宮下　叶にとっても、物語的にも渡守が戻ってくるのが大きいんじゃないですか。エツコも渡守に気づかされることがあるし、彼は新たなこともやってくれるわけだから。

窪田　渡守については、まだ模索中ということもあるけど、そこまで過去には触れないから、それが難しいところでもあって。

石橋　脚本に描かれていない部分が、いろいろ多いんですよね。

窪田　そうそう。だから自分の中に想像の幅を広く持ちながら、説明はしすぎないように演じられたらいいのかなと思っている。

石橋　渡守とイオリの関係も、8年ぶりに再会したというだけではない、エモーショナルな部分はあるけれど……。

窪田　この作品では登場人物みんなに、物語の本筋に繋がるところがあるんですよね。つまり、物語の発火点がいろいろなところにあって、渡守とイオリの関係も全体を構成する一部にすぎない。だからそこだけをトリミングして説明するのは難しいし、「個」というより「全」で語るべき話なんじゃないかな。

石橋　個人のドラマがあるようでいて、実は本質はそこではない気がします。

窪田　だから全体として作品を体感してほしいですね。自分たちも役同士の関係性だけにフォーカスしているわけではないから。

宮下　感じてほしいことは別にあるというか。

――なるほど。その中で叶はメタファー的な要素が強いと。世界を牛耳るということは、叶は大人の象徴なんでしょうか。

窪田　どうだろう？　あそこまで自分のしたいことを貫き通すなんて、よほど信念がないとできないことですよね。だから叶はある意味一番純粋な気もします。きっと本当に周りのことなんかどうでもいいのだろうし、誰かの思いを背負うような意識はあるのかな？

田中　「人類のため」とは言っているから正義のつもりでいるんですよね。

宮下　最初は純粋だったから、イオリもエツコもついていったんですもんね。

窪田　正義のぶつかり合いですよね。

石橋　でも人類の多くは、良かれと思って生きながら、膨大なエネルギーを消費してますよね。限りある資源を「人類のため」と言って掘り起こし燃やしている。だから実際には私たちもそちら側なんだなと思います。たとえば高速増殖炉もんじゅも、無限にエネルギーが得られる素晴らしいものを作るはずだったのに、全然うまくいかなくて。そしてうまくいかなかったと未だに言えていない。

田中　そして嘘はバレる。

争いがなく調和のある未来を残す。
それがテーマとして一番大きい。
――窪田

窪田　なんで叶は嘘をついちゃったのかな。

田中　被害が大きすぎて対応しきれなくなったのか。そもそも叶もミスっちゃっただけなんだよ……。

窪田・石橋・宮下　（爆笑）。

石橋　イオリというキャラクターは“赦し”がテーマになっていると思うんですけど、大きなテーマだけに、それを個人にどう落とし込むかですね。意図せず起きたことでも彼女が傷ついたのは事実だから、赦すのは簡単ではないし。そこが最大の葛藤なのかな。

田中　難しいよね。これは大人が子供をいろいろな形で利用しようとする話だから。

窪田　でもその反面、エツコは子供の犠牲をなくそうとはするし、イオリも子供たちを真摯にサポートしている。渡守もそうだけど子供たちにバトンを繋ぐ役割を果たそうとしているとは思うんですよね。争いがなく調和のある未来を残す。おそらくそれが作品のテーマとして一番大きいだろうし、そのために大人がどう動くか。だけど……。

宮下　それをどうやるのかが難しいよね。今は形にする方法を探っていて。エツコはとにかくクレバーで、なにがあっても動揺しない人だとラルビさんから言われていて。舞台上でズッコケたらおしまいですね（笑）。

田中　そこは叶と一緒だね。仲間だ！

この舞台に登場する女性には、
人間としてのタフさがある。
――石橋

石橋　（笑）。そういえば、ラルビさんは女性の強さについてよくお話しされますね。イオリもエツコもタフな女性たちなんだ、と。
宮下　どちらも強い女性なんだ、と。
石橋　気が強いとかだけではなく、人間としてのタフさ、みたいなことですよね。

固定概念を打ち壊したときに見えるもの

――お話を伺っていると皆さんお互いに、率直に感じたことをお話しされていることが伝わってきます。
宮下　なんかもう「なにを言っても大丈夫」みたいな感じになってますね。
窪田　正直な人たちが集まったチームだから気兼ねがないですね。話したいときは話すし、自分のことがやりたいときは自分のことをやる、みたいな感じです。
宮下　だから居心地はものすごくいい。顔を見れば、なにを思っているのかがわかる。
窪田　だから家にいるみたいな感覚があるんです。気づいたらそうなっていた。
石橋　やらないといけないことが多い分、変に遠慮していられないところもあって。おかげで皆さんとお近づきになれました（笑）。
――そのほかに、この稽古場ならではの楽しいところなどはありますか？
石橋　この現場にはダンスのエキスパートが大勢いらっしゃるので、「これ、教えてください！」とお願いしてやってみています。
窪田　よくそのシーン見てる。
田中　公演に関係する部分だけでなく、個人的な興味で表現にコミットしていけるのが、すごくいい。
石橋　それはすごく楽しいですね。
宮下　見ていて楽しいし、ダンサーの皆さんと一緒にやると本当に楽しいんですよ。あとは哲司さんも……。
田中　いやいや、僕はちょっと（笑）。
窪田　哲司さんもコンテンポラリーダンスの場面があるじゃないですか。
宮下　それがすごくかっこいいんですよ。そしてフライングシーンでの、窪田くんの身体能力の高さにも驚かされました。
石橋　マイケル・ジャクソン並みの身体能力。
田中　なにがすごいって背中の筋肉ですよ。なかなかあれだけの背中の人っていない。
宮下　頭の小ささに比べて、肩幅の広さがもうちょっとおかしいもんね？
窪田・石橋・田中　（笑）。
窪田　台本を一度置いて、転換を含めた全体の動きをどう見せるのか、そこを集中的に稽古する期間があったんです。そこでラルビさんの指示に沿って動きながら、いろいろ作ってみたんですよね。
田中　そのときにできた窪田くんのシーンがすごく美しかったんですよ。それだけでもう観る価値があると思ったくらい。
宮下　稽古動画を観たうちの事務所の人が、「窪田さんはふだん、あの運動能力を隠してるの？」と言っていましたから。私もこんなにすごいとは知らなかったですね。
田中　あまりにも激しく動いていたから「うわっ、大丈夫か⁉」と思ったよね。
宮下　もうシルク・ドゥ・ソレイユみたいで。
窪田　やるからには求められるところまで持っていかないといけないので。でも、あの難しいフライングを果たして全公演でやり切れるかな（苦笑）。フライングのワイヤーって、操るのがなかなか難しいんですよね。
石橋　しかも舞台が斜面だから……。
窪田　踏ん張りが利かないんですよ。ワイヤーの支点の真下に体を置かないといけなくて。床に印がついていたんですけど。気づいたらそれがなくなっていて。たぶん自分の靴底についていたんですけど（笑）。
田中　（笑）。けど、窪田くんのフライングを見たときにホッとしたんですよ。「これでお客さんに納得してもらえるぞ」って。
窪田　動きの集中稽古をした期間のラスト2日くらいで、いろいろなことが動き始めたような感じがありましたね。
宮下　「あ、こうなるんだ」と見えてきたものがあったから、それはすごく安心できたというか。劇中の歌にもすごく癒やされます。
窪田　すごくわかります。家に帰ってからも、頭の中をずっとあの歌が流れているんです。
宮下　ずっと稽古場で聴いているから、頭の中をめぐっちゃうんだよね。
窪田　（石橋）しーちゃんも歌っているし。
石橋　私は2曲くらい、鼓童の方と一緒に歌っていて。稽古でいろいろ考えすぎて行き詰まってくると、そっと私は（山脇）千栄さんのところに行って、歌の練習をして癒されて戻ってきています（笑）。
宮下　そしてダンサーの人たちもとても素敵なんです。稽古では時に重い空気になること

居心地はものすごくいい。
顔を見れば、
思っていることがわかる。
――宮下

もあるけど、みんなニコニコしながらどうすればよくなるかを考えて試している。
石橋　ピースフルな方ばかりなんですよね。
宮下　その中でも大植さんというホットパンツ兄さんが（笑）、振付助手としてみんなをまとめてくれています。めっちゃみんなから「真太郎、真太郎」と言われていて。
窪田　あのエネルギーは本当にすごいですね。とても癒やされるし、「気持ちを落としている場合じゃないぞ」と思える。
石橋　確かにそうですよね。役者とダンサーとで役割が違う分、全然違う視点から物事を見てくれていると思いますし、それに救われることもあります。
――ありがとうございます。それでは最後に今後の稽古にどう取り組んで、本番に臨みたいかを教えてください。
田中　僕は身体表現との融合ですね。
窪田　おおっ!?
田中　ダンサーの皆さんの邪魔にならないように頑張りたいと思っております（笑）。
石橋　私は可能性を狭めることなく、最後まで稽古とこの作品を面白がれたら。芝居に関して「普通とは違うな」と感じてしまうと考え込むこともありますが、やってみようという気持ちを捨てることなく頑張りたいです。
宮下　私はラルビさんのおっしゃることを聞いて考えを深めながら、稽古でさらにぶっ飛び、ぶっ込んでいきたいですね。
窪田　今は稽古の中でも一番きつい時期だと思います。いろいろなことを摺り合わせる段階を迎えているけど、本当にいろいろなジャンルの人が集まっているから、そこにはさまざまな視点があって。守りに入って固定概念に寄りかかれば楽だけど、しーちゃんが言う通り、それを壊して柔軟になったときに見えてくるものが絶対にある。この舞台が観てくれるみなさんにどう届くのかは未知だし、今も大変ではあるけれど、なんでもやってみることで、本番でいい顔になれているんじゃないかな。そうなれるよう、苦難の中に一筋の光を見つけて、答えを出してきたいと思っています。

これでお客さんに納得してもらえる。
舞台上の窪田くんを見てそう思った。
――田中

[座談会] 板垣瑞生×永田崇人×坂ノ上茜×村田寛奈

エヴァンゲリオンのパイロットとして、新たな『エヴァ』世界を生きる四人の俳優たち。
子供のような「大人」たちと向き合い、戦いに身を投じるパイロットを、彼らはどう演じようとしているのか？
互いを認め合い、信じて切磋琢磨する思い。それぞれを反映して生まれつつある「子供」たちについて語り合う。

チームだからわかる、素顔と役の距離

――パイロットチームの四人は、非常に仲良しだと伺っていますが……？

永田　エヴァのパイロット役を与えられた人たちだけあって、僕はさておき三人は心にピュアな部分があって……なんで笑ってるの？

村田　「僕はさておき」という前置きが面白くて笑っちゃいました（笑）。

永田　で、僕は一生懸命そこに行こうと頑張っているところです（笑）。

板垣　それぞれが役に近いから、劇中でも自然に役割が分担できているし、会話も齟齬なく進んでいく。チームワークがいいんです。

村田　皆さんとは初めましてだったから最初は緊張しましたが、作品や台本について四人で話す機会も多くて。空き時間もみんなでしゃべっているよね。

坂ノ上　生産性のある話から生産性のない話まで（笑）。一緒にいると安心感があるんですよ。それぞれのキャラクターがいい感じに役にハマっています。

――では、それぞれが演じる役とご本人のキャラクターについてもお聞きしたいです。

永田　演じる役を通じて、本人のキャラクターをあぶり出す、ということですね？

板垣　トウマはエースパイロットだけど、今回もこの中では永田くんがエースだと思うんです。年齢も上だし舞台の経験も多くて、大人としてしっかりした部分を持っている。愚直に努力する人なので、そこがトウマがパイロットルームで練習する姿とも重なって。

永田　……聞いているとグッと来ちゃうな。

板垣　背中を見てると僕たちも頑張らなきゃと思いますね。

村田　私も演技やキャラクターについて崇人くんに聞くことが多いし、それはトウマに重なるような気がします。

坂ノ上　一見おちゃらけているようで、実はすごく作品や役を考えている人。その真面目さや繊細さはトウマに似ているし、いつも子供チームの先陣を切ってくれるんです。

永田　……この座談会、参加してよかった。

板垣・坂ノ上・村田　（笑）。

永田　瑞生は小さい頃からお芝居をしているし、舞台は初めてだから最初は戸惑ったかもしれないけど、今はすごく弾けていて、すごい俳優だと思います。稽古でも、あるシーンで彼のお芝居が飛び抜けてよかったことがあって。ナヲがトウマを思って話すシーンなんですが嘘偽りが一つもなくて、ハケてからちょっと泣きそうになりましたから。あ、でも、そういう話をするんじゃないですよね？

板垣　えっ、そういうことでしょ！

村田　（笑）。ナヲにはなにを考えてるかわからないところがあるけど、瑞生くんにもときどきそういう瞬間があって（笑）。さっき崇人くんが言ったシーンも、今までと全然違うものをパッと出せるし、そういうものを受け取って繋がなければと、いい意味でプレッシャーや刺激をもらっています。

坂ノ上　瑞生くんはミステリアスだけど、相談するといろいろ考えて説明してくれるんです。でも話が私のキャパを超えて、内容がわからなくなることがあるのは申し訳ないです（笑）。でも本当にまっすぐ堂々としていて。それがナヲの存在感にリンクしています。

板垣　ありがとうございます！

永田　次は茜に行きますか？　茜は今までに出会ったことがないタイプというか……、この世の悪いものを、まだなにも見たことがないんじゃないかな。そして彼女がいると雰囲気が一瞬で変わる。天性の“華”ですね。

板垣　才能ということだよね。

永田　うんうん。今日はここにいないから、特別に言いますけど……。

坂ノ上　いるよ～、ここに！（笑）。

板垣　茜さんにはある種の天真爛漫さ、自己中心ではない、周りにいい影響をくれる天真爛漫さがあるから、ヒナタはハマり役だと思いました。僕もいろいろなヒナタを引き出せたらいいなと思うし、茜さんは底が知れない、突破力のあるロケットみたいな人だから、これからの稽古でももっと飛ばしてほしい。

それぞれが役に近いから、
劇中でも自然と役割が分担できる。
――板垣

村田　茜ちゃんはとてもまっすぐだから、茜ちゃんのヒナタからは全力投球の強い意志を感じます。ヒナタとエリは二人でいることが多くて、私たちも楽屋が一緒で、稽古場の席も隣だからよくしゃべるんです。茜ちゃんはなんにでも興味津々で、話をしていると私も一緒にいろいろなことを考えられる。劇中ではエリとヒナタはバチバチしてるように見えるけど心の底では繋がっている。その関係性を素を通して作れている気がします。

永田　じゃあ最後は寛奈のターンですけど。

村田　……最後だからって、悪口ばかり言ったりしないでね？

永田　そんなことしないって！　（悪口っぽく口調を変えて）なんかこの前～。

板垣　もう寛奈さんが～。

村田　やめて～！（笑）。

永田　寛奈もチャランポランなふりをしているけど、非常にクレバーなんですよ。いろいろなことを考えているし、誰にも持ってない色を持っていて、実はミステリアス。

板垣　そこは僕に近い感じ？

永田　……ちょっと違うかな（笑）。

坂ノ上・村田　（笑）。

永田　すごく魅力的だし、人間関係の潤滑油になってくれている。グループにいた経験が長いから周囲に気が遣えるし、そういう意味

地味だけど不思議な状態を作るのは
実は一番難しい。
——永田

で一番大人です。こういうふうに振る舞わないといけないなと思って尊敬してます。

村田　やったね！

板垣　そして寛奈さんはエリとして作品のテーマを担うけど、この四人の中で言えば、寛奈さんがその役割に一番ふさわしいと思う。稽古を見ていても「この人なら、観客にテーマを届けられる」と感じられるからです。ある種の精神性、慈愛みたいなものがあって、柔らかいけど強い。そういう意味では、ラルビさんに一番近いのかもしれないですね。

坂ノ上　最初に会ったときはクールなイメージがあったけど、実はとても気さくだしスッと人の輪に入れる人ですよね。この四人を回してくれているのは寛奈ちゃんだと思うし、そういう寛奈ちゃんが演じるからこそ、エリがいるんだと感じます。ただやさしいだけではなく、悩みながらも「自分はこうしたい」という意思を持つ役柄が、本当に見ていてぴったりなんです。

エヴァパイロットとしての心と身体を

——では次にエヴァのパイロットを演じる面白さ、大変さを教えていただけますか。

板垣　子供として、大人に抵抗しなければいけないところが大変だと思います。子供っぽい大人たちがいるという事実と向き合い、大人びた子供として彼らにどう返していくのか。それを考えるのが日々の楽しみですね。子供の頃は「大人になれ」と言われていたけど、いざ大人と言われる年齢になると、実は子供っぽい大人も大勢いることがわかってしまったんですよね。

永田　まさにこれはそういう話だからね。

板垣　そして、この作品は子供たちが支える部分も大きいと思うけれど、それはこの四人でなければ無理だったような気がします。僕らがバラバラになってしまったら、きっと大変なことになると思うから。

永田　瑞生の中で、これまでの経験もナヲの役作りに繋がっているのは面白いよね。でもいいことを言われすぎちゃったからみんな、話すことがなくなったんじゃない？

村田　じゃあこれでおしまいにする？（笑）。

板垣　いや！　なにかあるでしょう！

永田　じゃあ僕はフライングの話をしようかな。エヴァにパイロットが搭乗するシーンをフライングで表現するんですけど、フライングってただ釣り上げられて回ったり、ジャンプしたりすればいいわけではないんです。派手な動きは、そう使うように作られているから意外とできるんだけど、足は床についているけど体は浮いている、みたいな、地味だけど不思議な状態を作るのが難しくて。

坂ノ上　うん。難しいよね。

永田　そこはエヴァに搭乗している様子と大人の管理下に置かれた子供のダブルミーニングになっていて。ラルビさんは自分や機体をコントロールする不自由さと結びつけているのが面白いんですけど……。やる側としては最初にやった日の筋肉痛がもうヤバくて。みんなで筋肉痛だと言っていたら、寛奈だけは「私は別に……」とか言っていて。でも翌日、僕らの筋肉痛が落ち着いた頃になって「ちょっと来たかも……」と言ってました（笑）。

板垣　来てるじゃん（笑）。

坂ノ上　遅れてくるの、逆にヤバいよ！

村田　そうなの。で、最近は毎日来るようになりました（笑）。動きの集中稽古したとき、結構長時間ワイヤーに釣られたんですけど。翌日起きたら歩けないかも、と思うくらいの筋肉痛で。ベッドから降りようとしたら感覚がバグっているのか膝がカクンとなって。

坂ノ上　ええーっ！

板垣　あとさ、寝てるときに体がピクッ！となならなかった？

村田　なったなった！

永田　それ、疲れ過ぎるとなるやつだから！

板垣　そうなんだ。初めてなったから……。

村田　ワイヤーで釣られたせいかと思った。

永田　まぁ、簡単にやっているように見えるでしょうけど、もう本当に大変だし難しくて（笑）。そこが伝わらないのがくやしいね。

村田　確かにくやしいけど、難しそうだなと思わせるのもダメだから（笑）。

坂ノ上　稽古で見ると、本当にきれいなシーンになっているんですよね。

永田　本番終わりにお客さん一人ずつ、パイロットになってもらいたいくらい。

村田　エヴァパイロット体験！（笑）。

板垣　じゃあ装着とか僕らでやるので開催しますか（笑）。「右回り右回り、はーい、難しいでしょ？」って。

永田・坂ノ上・村田　（爆笑）。

坂ノ上　フライングも大変だけど、私はヒナタがエヴァに乗る意味とかを考え出したら、

余白のある作品ならではの曖昧さ。
それを受け止め、答えを探したい。
——坂ノ上

もうきりがなくなっちゃう。これだという答えが見つからないことに苦労しているかもしれない。表面的には「エヴァに乗りたい！そして勝つ！」という主張はあるけど、ヒナタにはきっとそれ以外に、考えていることがいっぱいあるだろうから。

板垣　エヴァパイロットらしい悩みだね。

永田　だからもう、茜はパイロットになっているということだよね。

坂ノ上　そうかも（笑）。そういうところ、みんなはどうやって考えてる？

永田　トウマは「目の前の大切な人、一人のために戦え」と言われるから、そういうことなのかな。それは各々にあるのかもしれないし、ない人もいるのかもしれない。

坂ノ上　そう教育されてきたから、疑問を持たないのかなとも思うけど、命を懸けて戦うのは絶対に怖いだろうし。教育で恐怖を克服できるのかとか考えるときりがなくて。

永田　そういう意味では子供たちも、自分の中に矛盾を抱えながら生きているのかもしれないね。自分も「なぜ俳優をやっているのか」と聞かれても、一言では言えないというか。

板垣　ただ、不安ではあるよね。役にとっての大きな目的が定まらないのは。トウマがいなくなって、その目的を失ったという捉え方もできるかもしれないけど。

坂ノ上　うん。余白の多い作品だからこそ、そういう曖昧さも必要なのかなとも思うけど、自分の中でモヤモヤするというか。これからの稽古でちょうどいいところを見つけたい。

村田　エリも担うテーマが大きいから、それをすぐに自分のことにするのは難しい。演じていく中で感覚的に、自分の中に落とせたらいいのかな。公演もこれだけあるから変わっていくところもありそうじゃない？

永田　そこは変わっていいと僕は思う。急に出てこなくなるとかはダメだけど（笑）。

エリが担う大きなテーマを
演技を重ねて自分に落とせたら。
——村田

板垣・坂ノ上・村田　（笑）。

永田　あくまで僕の考えだけど、辿る道筋は違っていいと思うし「今日はこう考えてみることができたな」と総括できるときっと楽しいんじゃないかと思っています。

Staff Profile

舞台版構成台本

ノゾエ征爾

Seiji Nozoe

脚本家、演出家、俳優。劇団はえぎわ主宰。12年『〇〇トアル風景』にて第56回岸田國士戯曲賞受賞。17年『鳩に水をやる』にて第21回鶴屋南北戯曲賞ノミネート。松尾スズキ氏原作の絵本を舞台化した音楽劇『気づかいルーシー』や、故・蜷川幸雄氏の遺志を継ぎ、さいたまスーパーアリーナでの大群衆劇1万人のゴールド・シアター2016『金色交響曲～わたしのゆめ、きみのゆめ』の脚本・演出を務めるなど劇団以外でも活躍。近年の主な作品に【舞台】『ボクの穴、彼の穴。』（翻案・脚本・演出）、『ピーター＆ザ・スターキャッチャー』（演出）、『ぼくの名前はズッキーニ』（脚本・演出・出演）、『物理学者たち』（上演台本・演出・出演）、『明るい夜に出かけて』（脚本・演出）などがある。

上演脚本

渡部亮平

Ryohei Watanabe

2010年に第23回シナリオ作家協会大伴昌司賞佳作を受賞。同年『アザミ嬢のララバイ』（MBS）で脚本家デビュー。12年に自主制作映画『かしこい狗は、吠えずに笑う』がぴあフィルムフェスティバルに入選しエンタテインメント賞及び映画ファン賞受賞。第22回TAMA NEW WAVEでグランプリ受賞。14年に第23回日本映画プロフェッショナル大賞で新人監督賞を受賞。現在はドラマ、映画の脚本や監督のほか、CMやMVでも活躍。近年の主な作品に【映画】『3月のライオン』（脚本）、『ビブリア古書堂の事件手帖』（脚本）、『麻雀放浪記2020』（脚本）、『哀愁しんでれら』（脚本・監督）などがある。

ビジュアルディレクション・衣裳デザイン

柘植伊佐夫

Isao Tsuge

人物デザイナー。映画『おくりびと』（滝田洋二郎監督）など、多くの映像作品のビューティディレクションを担当。2008年以降、作品中のキャラクター像をトータルで創造する「人物デザイン」というジャンルを開拓。近年の主な参加作品に【舞台】『プルートゥ PLUTO』（シディ・ラルビ・シェルカウイ演出）、NODA・MAP『Q：A Night At The Kabuki』（野田秀樹演出）、『酔いどれ天使』（三池崇史演出）、『蜘蛛巣城』（赤堀雅秋演出）【映画】『シン・ゴジラ』、『翔んで埼玉』、『ばるぼら』、『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』【ドラマ】『龍馬伝』、『平清盛』、『ストレンジャー～上海の芥川龍之介～』、『岸辺露伴は動かない』、『どうする家康』（以上、NHK）などがある。

セットデザイン

岩本三玲

Mirei Iwamoto

武蔵野美術大学在学中にニナガワ・カンパニーに所属。2012年、蜷川幸雄演出の『ロング・グッドバイ』で美術家デビュー。さらに外国人美術家のコーディネーター、舞台以外の美術家の美術助手としても活動している。近年の主な参加作品に【舞台】『真夏の夜の夢』（シルヴィウ・プルカレーテ演出）、『レ・ミゼラブル』（ローレンス・コナー、ジェームズ・パウエル演出）、『物語なき、この世界。』（三浦大輔演出）、『ジーザス・クライスト＝スーパースター in コンサート』（マーク・スチュアート演出）、『泥人魚』（金守珍演出）、『セールスマンの死』（ショーン・ホームズ演出）などがある。

音楽

アレクサンドル・ダイ・カスタン

Alexandre Dai Castaing

フランス人の父とベトナム人の母のもと、パリ近郊で生まれ育ち、6歳からクラシックピアノを始め、パリでクラシックピアノ、ジュネーブで現代音楽とジャズドラム、伝統的なベトナムの太鼓を学ぶ。Bruno LETORT の現代音楽レーベル Musicube からソロアルバム『Tear Is Dancing』、イギリスのレーベルBit Phalanxから、沖縄の伝統楽器とエレクトロを融合させたSayaconceptのアルバム『SôkiET』をリリース。映画、広告、ゲーム、サーカス、アニメなどに楽曲を提供し、ネスレ、シトロエン、プジョーなど100を超えるCMに携わる。多くの振付家にも作品を提供しており、2022年にはシディ・ラルビ・シェルカウイ『Ukiyo-e 浮世絵』の楽曲を共同作曲した。

照明

吉本有輝子

Yukiko Yoshimoto

1995年から演劇、ダンスの舞台照明デザイナーとして活動を始める。2003年にNPO劇研の設立に参加。京都の小劇場アトリエ劇研の運営に携わる。2005年度京都市芸術文化特別奨励者。06年に、文化庁新進芸術家海外留学制度研修員としてパリ市立劇場で1年間研修。17年に第36回日本照明家協会賞（舞台部門大賞）受賞。武蔵野美術大学客員教授。近年の主な参加作品に【舞台】木ノ下歌舞伎『桜姫東文章』（岡田利規演出）、『博士の愛した数式』（加藤拓也演出）、MONO『なるべく派手な服を着る』（土田英生演出）、『ブレイキング・ザ・コード』（稲葉賀恵演出）、ゆうめい『ハートランド』（池田亮演出）などがある。

映像

カラーズクリエーション株式会社

COLORs CREATION

世界中の多彩で素晴らしいクリエイターやアーティストが集結したクリエイティブカンパニー。プロジェクションマッピング協会を母体に2019年に創設。常にオリジナルな企画、質の高いコンテンツを生み出すクリエイティブプロダクションであり、世界中の優秀なクリエイターのハブエージェントでもある。クリエイティブディレクターで、プロジェクションマッピングや映像演出のパイオニア石多未知行を中心に、映像制作、空間演出、ライブや舞台の演出、イベント企画、PV／MVの演出など、多くの実績と多岐にわたる経験を有する。世界で活躍する先鋭クリエイターとの幅広いネットワークにより、クリエイターの個性や表現を社会へ機能させるべく活動している。

映像制作

マキシム・ギスラン

Maxime Guislain

ベルギー出身のCG／舞台映像クリエイター。流体計算・物理計算を駆使したCG表現を得意とし、繊細でリアルな映像とダイナミックな3Dアニメーションで、圧倒的な世界を生み出し続けている。そのハイセンスな映像はプロジェクションマッピングや舞台空間などで力を発揮し、豊かなライティングと空間性が生み出すCGは、立体的で幻想的な世界を描き、高い評価を得ている。2014年度プロジェクションマッピング国際大会『1minute Projection Mapping Competition』グランプリ受賞。近年の主な参加作品に、ラスベガスのショー『Amystika』映像演出、Dirty Monitor（ベルギー）イベント用プロジェクションマッピング映像制作などがある。

音響

武田安記

Aki Takeda

1991年からオンシアター自由劇場に音響として在籍。解散後、サウンドクラフト（現・SCアライアンス）に入社。コンサート、演劇などジャンルを限らずに活動。近年の主な参加舞台作品に地球ゴージャスシリーズ（岸谷五朗演出）、コクーン歌舞伎、冬のカーニバルシリーズ『Mann ist Mann』（以上、串田和美演出）、『プレイタイム』（梅田哲也、杉原邦生演出）、『近松心中物語』（長塚圭史演出）、s**t kingz公演など。現在はさだまさしコンサートツアーのチーフエンジニアを務める。

特殊造形デザイン・特殊造形制作

松岡象一郎

Sho-ichiro Matsuoka

東京工芸大学短期大学部卒業。株式会社ジーエム代表。特殊メイクの技術を主軸に、造形やファッションなど様々なジャンルを融合させ作品に取り入れる事により、他の追随を許さない独自の世界を構築。CM、映画、音楽、ファッション、ブランド広告など様々な媒体を手がける。近年の主な参加作品に【舞台】『半神』、NODA・MAP『逆鱗』（以上、野田秀樹演出）、オペラ『蝶々夫人』（宮本亜門演出）、『獅子と仁人』（タグチヒトシ演出）【映画】『恋は雨上がりのように』、『累』、『東京リベンジャーズ』、『東京リベンジャーズ2 血のハロウィン編 -運命-／-決戦-』【ドラマ】『いだてん～東京オリムピック噺～』（NHK）、『ルパンの娘』（CX）などがある。

衣裳デザイン・スタイリスト

羽石輝
Akira Haneishi

2003年に渡仏。Studio Berçot 卒業後、Ann Demeulemeesterなど、パリで活動。2014年帰国。エスプリのあるスタイリングと、ファッション全般に対するディレクション能力の高さを柘植が認めクーゲンに参加。現在はスタイリング以外に人物デザインのサポートも担当する。近年の主な参加作品に【舞台】BALLET APOLLO『ROMANCE No.4』(NAOKO総合演出)、『オペラ 蝶々夫人』(宮本亜門演出)、『Q：A Night At The Kabuki』(野田秀樹演出)、『常陸坊海尊』(長塚圭史演出)【映画】『ばるぼら』、『シン・仮面ライダー』【ドラマ】『俺のスカート、どこ行った？』(NTV)、『ストレンジャー～上海の芥川龍之介～』(NHK)、『岸辺露伴は動かない』(NHK)などがある。

衣裳デザイン・衣裳制作

岩崎晶子
Akiko Iwasaki

1997年より活動開始。映像・広告・舞台・ミュージシャンなど幅広い分野で衣裳制作を行う。コミュニケーションを重視し、依頼者がなにを求めているのかを見出し衣裳を創作。衣裳制作／衣裳制作総指揮での参加作品に【舞台】ク・ナウカ シアターカンパニー『マハーバーラタ～太陽の王子ナラの冒険～』(宮城聰演出)、『蜘蛛巣城』(赤堀雅秋演出)【映画】『るろうに剣心』全シリーズ【広告】東京事変【TV】『ドレミノテレビ』(NHK教育)、衣裳デザインでの参加作品に【舞台】『BELL』(ニューヨーク・ダンス＆パフォーマンス・アワード(ベッシー賞)衣裳デザイン賞ノミネート)、『ZERO ONE』、『リンチ(戯曲)』(以上、余越保子演出)などがある。

ヘアメイク

波多野早苗
Sanae Hatano

ヘアメイクアーティスト。2003年よりフリーランスで13年間活動し、16年よりクーゲンに参加する。映像・舞台・広告・雑誌などさまざまなジャンルで活動。近年の主な参加作品に【映画】『恋は雨上がりのように』、『累』、『燃えよ剣』【ドラマ】『石川五右衛門』(TX)、『あなたには帰る家がある』(TBS)、『パラレル東京』(NHK)、『それ忘れてくださいっていいましたけど。』(paravi)【舞台】NODA・MAP『贋作 桜の森の満開の下』『Q：A Night At The Kabuki』(以上、野田秀樹演出)、『王将』(長塚圭史演出)、『酔いどれ天使』(三池崇史演出)、『蜘蛛巣城』(赤堀雅秋演出)などがある。

振付助手

大植真太郎
Shintaro Oue

※プロフィールはダンサー紹介ページ(P34)参照。

振付助手

セバスチャン・ラミレス
Sébastien Ramirez

スペイン系フランス人として南フランスに生まれる。ダンサー、振付師、アーティスティックディレクターとしてヒップホップシーンやコンテンポラリーダンス界で活躍。2015年に開催されたマドンナのワールドツアー「Rebel Heart Tour」では振付を担当するなど、世界各国で活躍している。コンテンポラリーダンス界で数々の賞を受賞しており、ニューヨーク・ダンス＆パフォーマンス・アワード(ベッシー賞)では、最優秀パフォーマンス賞と優秀ダンス作品賞を受賞。またエアリアルやリギングのアーティストとしても評価され、本作ではシディ・ラルビ・シェルカウイの振付助手として、主にフライングワークを手がけた。

演出補

杉原邦生
Kunio Sugihara

1982年生まれ。演出家、舞台美術家。KUNIO主宰。京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)映像・舞台芸術学科、同大学院芸術研究科修士過程修了。学科在籍中より演出・舞台美術を中心に活動。2004年、自身が様々な作品を演出する場として、プロデュース公演カンパニーKUNIOを立ち上げる。KUNIOでの主な演出作品は『エンジェルス・イン・アメリカ』、『更地』、『ハムレット』、『グリークス』、『水の駅』など。近年の主な演出作品に、木ノ下歌舞伎『勧進帳』『三人吉三』、スーパー歌舞伎II『新版 オグリ』、『プレイタイム』、『藪原検校』、『水の駅』、『パンドラの鐘』、『血の婚礼』などがある。2018年第36回京都府文化賞奨励賞受賞。

演出助手

加藤由紀子
Yukiko Kato

劇団四季技術部にて研鑽を積み、渡英。Central School of Speech & Drama大学院修了。帰国後、演出助手として活動を開始。近年の主な参加舞台作品に『夜への長い旅路』(フィリップ・ブリーン演出)、『ウェンディ＆ピーターパン』(ジョナサン・マンビィ演出)、『泥人魚』(金守珍演出)、『奇蹟 miracle one-way ticket』(寺十吾演出)、『もはやしずか』(加藤拓也演出)、『るろうに剣心 京都編』(小池修一郎演出)、NODA・MAP『Q：A Night At The Kabuki』(野田秀樹演出)、『室温～夜の音楽～』、『ルードヴィヒ～Beethoven The Piano～』(以上、河原雅彦演出)、『ジェーン・エア』(ジョン・ケアード演出)などがある。

通 訳

時田曜子
Yoko Tokita

DISCOVER WORLD THEATRE シリーズ全作の演出家(フィリップ・ブーリン、ジョナサン・マンビィ、リチャード・トワイマン、サイモン・ゴドウィン、マシュー・ダンスター、リンゼイ・ポズナー)通訳のほか、近年では『FORTUNE』、『セールスマンの死』(以上、ショーン・ホームズ演出)などに演出家通訳として参加。翻訳作品にサイモン・スティーヴンス『Birdland』、アーサー・ミラー『THE PRICE』、ヴィッキー・ドノヒュー『MUBLARKS』など。第15回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞。

舞台監督

足立充章
Mitsuaki Adachi

1996年、蜷川幸雄演出『ハムレット』より舞台監督助手として活動を開始する。2011年文化庁新進芸術家海外留学制度研修員としてイタリアのテアトロ・ギズメットで作品作りに携わる。帰国後は蜷川作品を始め、長塚圭史演出作品など幅広く参加。近年の主な参加舞台作品に『夜への長い旅路』(フィリップ・ブリーン演出)、『湊横濱荒狗挽歌～新粧、三人吉三。』(シライケイタ演出)、『パ・ラパパンパン』(松尾スズキ演出)、阿佐ヶ谷スパイダース『老いと建築』(長塚圭史演出)、『パンドラの鐘』、『血の婚礼』(以上、杉原邦生演出)、『スカパン』(串田和美演出)、『蜘蛛巣城』(赤堀雅秋演出)などがある。